

ディテール

建築の詳細

DETAIL MAGAZINE
FOR ARCHITECTS
AND ENGINEERS
1991-JULY

季刊・夏季号

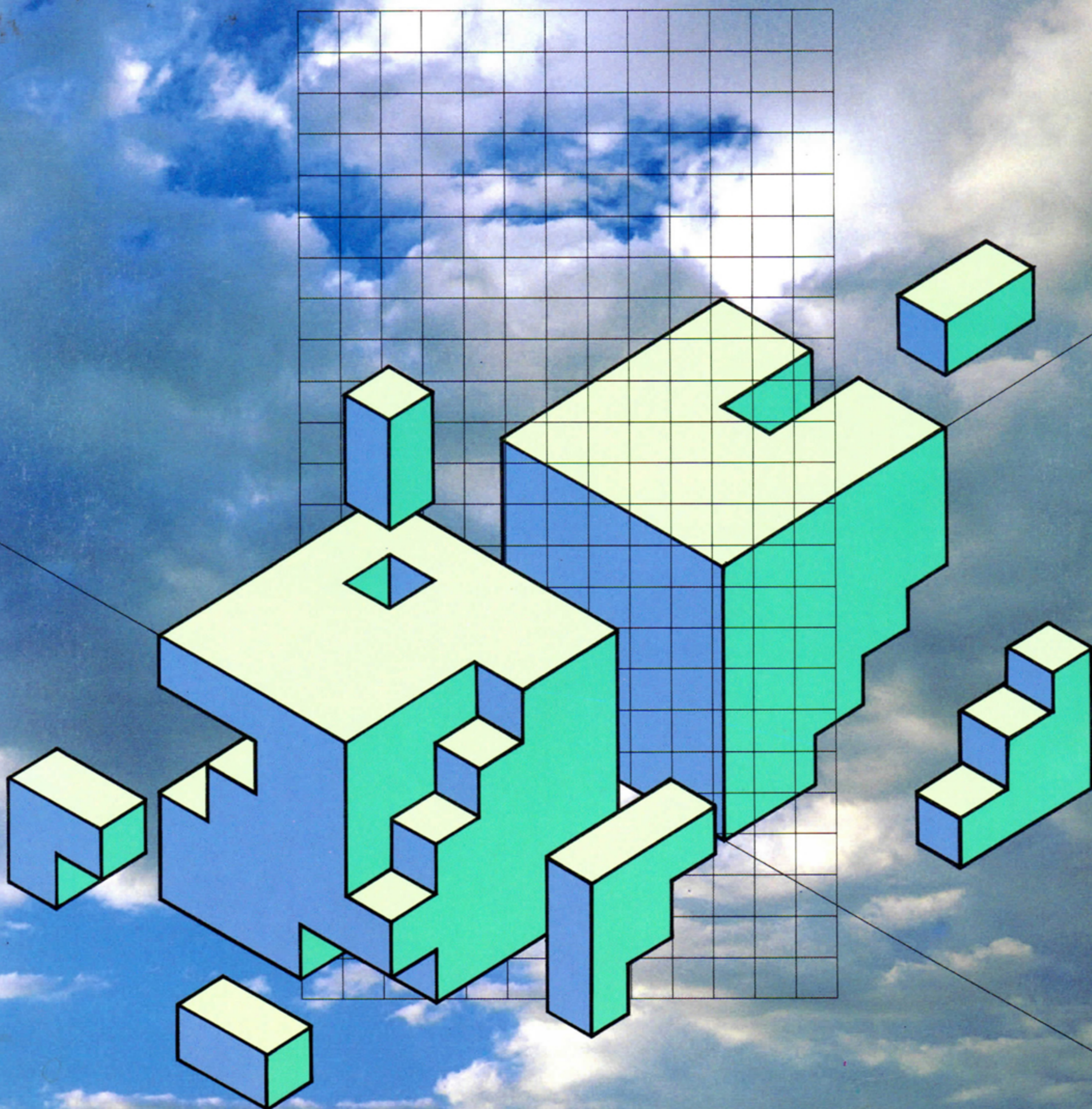
109

特集 快適なトイレ

センチュリータワーのディテール
空間に浸透するディテール／第一工房
緊張感を生むディテール——中目黒教会

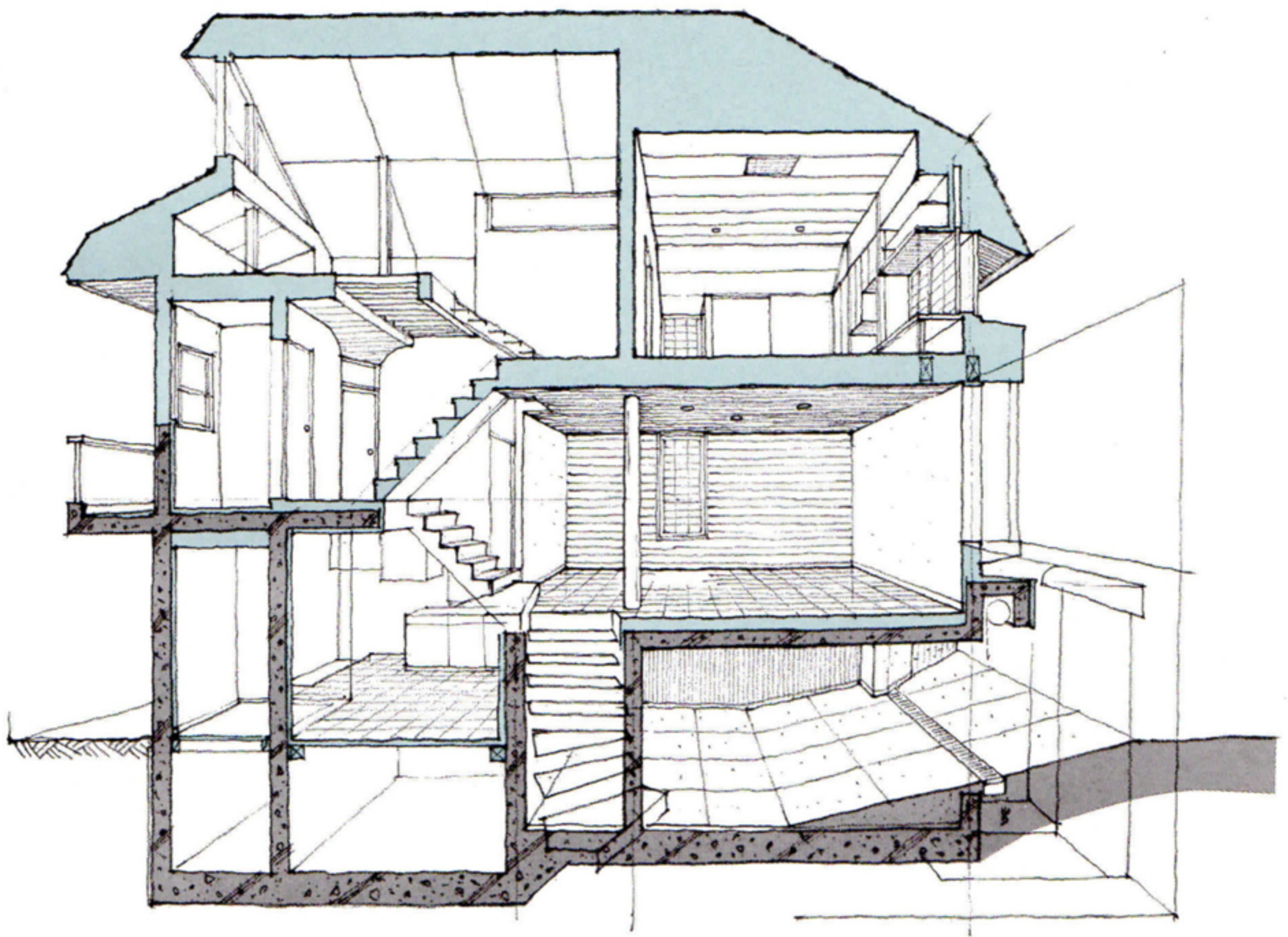
新連載 住宅の設計プロセス

連載
地中海のマリンリゾート
現代数寄屋ディテール入門
構造形態の世界——空間構成への挑戦



1. スキップで構成する6つの床レベル

設計室 MORI・森 史夫



連載に当たって

住宅の設計に関して、住み手の要求は多彩になり、敷地や工費などについても、いわゆる難条件、悪条件がいくつも重なってきている。教科書は無いに等しく、まさにケースバイケースで、ひとつずつ丹念に考え上げていくしかないように思える。

本誌104号に「モデリングとエスキースによる木造住宅の設計の試み」と題して二つの住宅のケーススタディを掲載したが、この号から数回にわたって、

設計アプローチやその手法の異なる設計チームによるプロセスの記録を連ねてみようと思う。いわく、敷地の規制との挑戦、構造からのアプローチ、複数世帯の関係を考える視点、地域性の空間への反映等。

結果は多様に表れていても、施主、設計者そして施工者間のコミュニケーションのプロセスを記述してみることによって、そこに住宅設計の基本的な共通原則あるいは生活の器としての住宅の原点みたい

なものが見えてくるかもしれない。

初回は、長年住みなれた土地を手離して、もう少し広い面積を郊外へ求めようかと迷った施主が、この土地への愛着と便利さを捨て切れずに、この敷地でどれだけ広く快適な空間を獲得できるか考えてほしいという課題をわれわれに与えたケースである。ひとつの実施案にゆきつくまでに、同じ条件によって、何人かの仲間がエスキースを繰り返した、その試行錯誤の記録である。

STEP-1

敷地条件と空間構成のスタディ

敷地の状況

東側は幅員4mの公道、北側は4m弱の袋小路の私道に接している。南側と西側は、それぞれ木造2階建の住宅が境界寄りに建っている。バス通りから一区画入ったところに位置

しているせいか、比較的静かな住宅街である。

施主の要求ポイント

大学教授（機械物理学）の夫と、眼科医の夫人、その母堂。当時中学1年と小学3年の姉

妹という家族構成。

4畳半くらいの天津だんつうとピアノを置く広い部屋。増えていく書籍の収納、車庫、できれば地下倉庫。狭くても庭がほしい、ひたすら明るい家が好き。

Fig-1

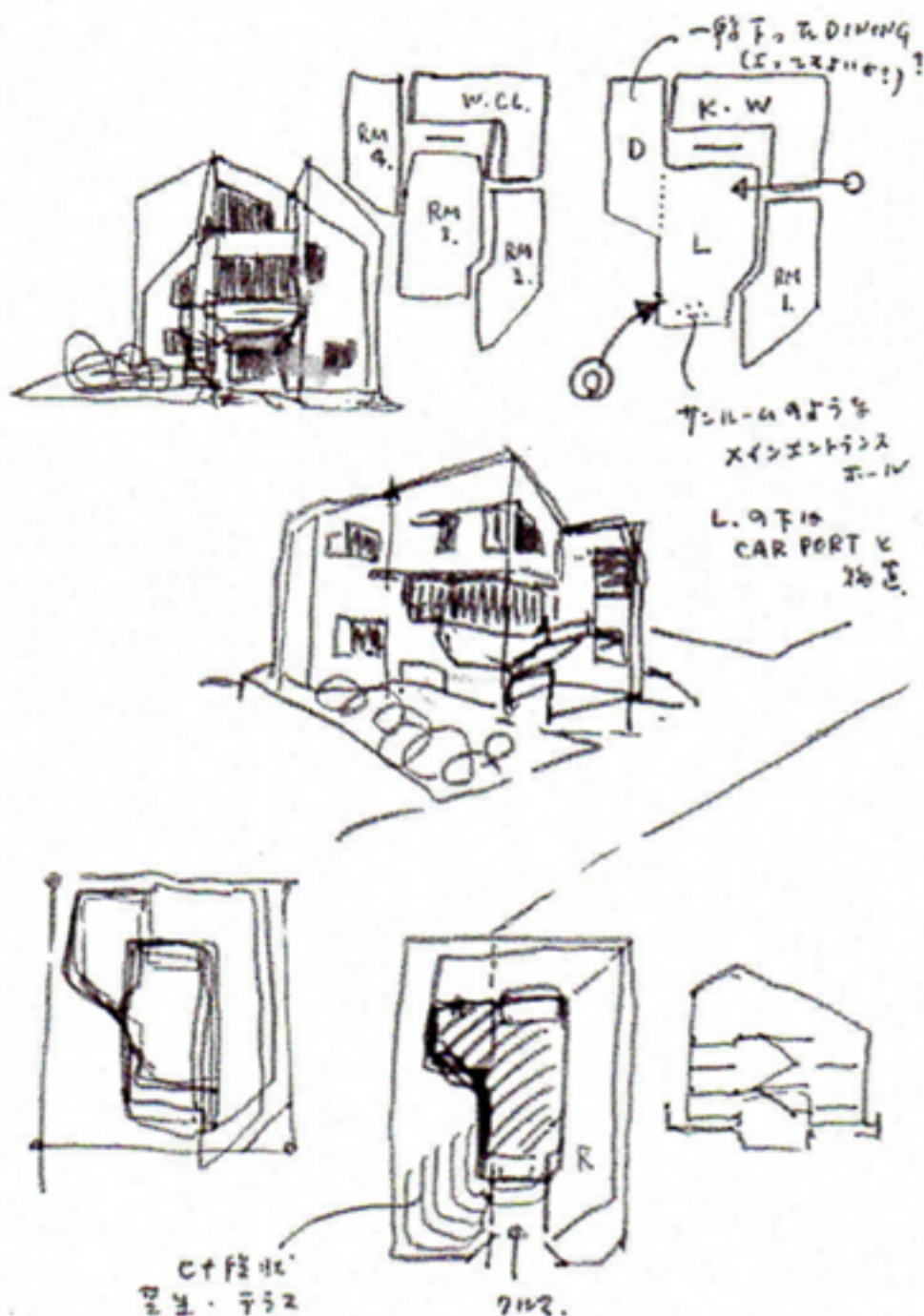


Fig-2

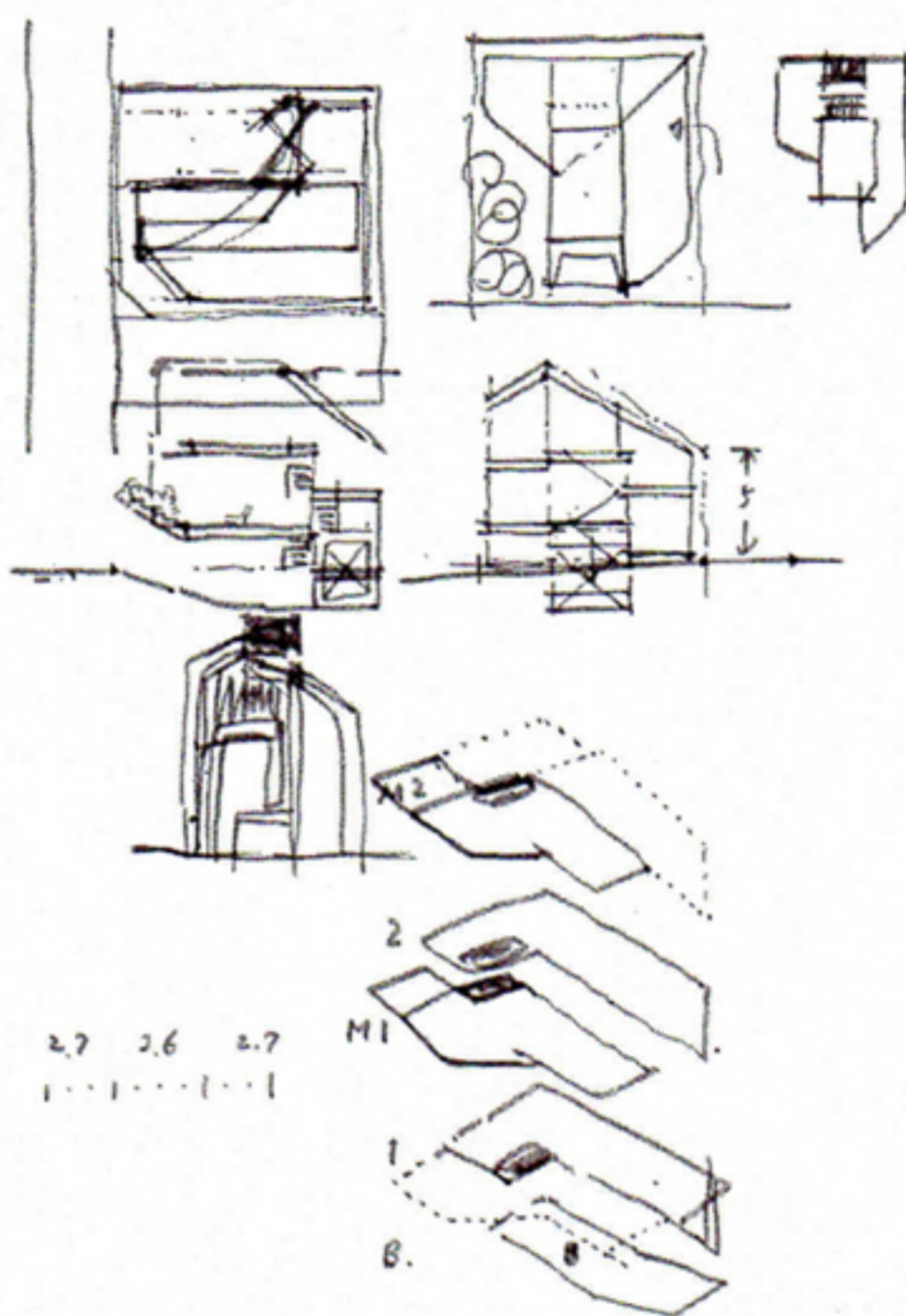


Fig-3

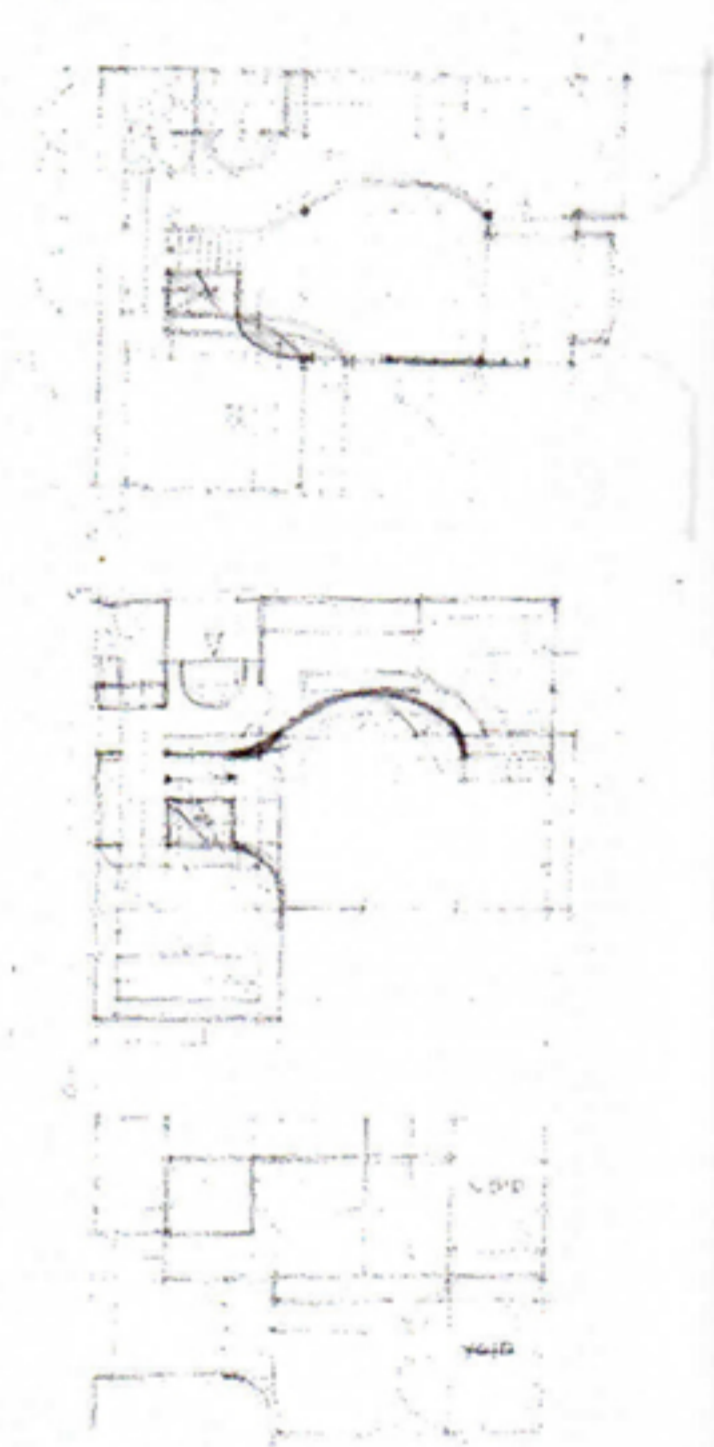


Fig-4

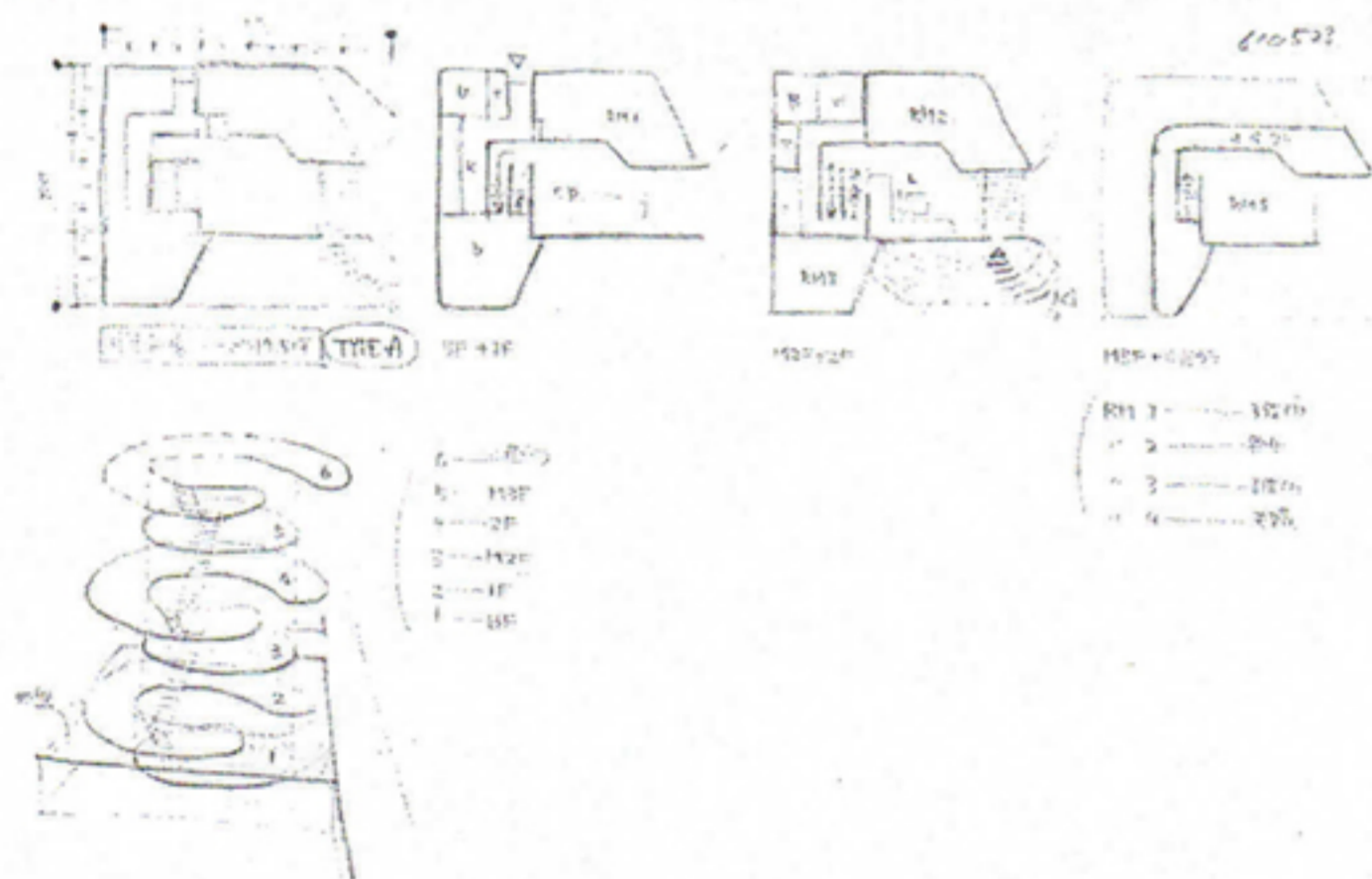
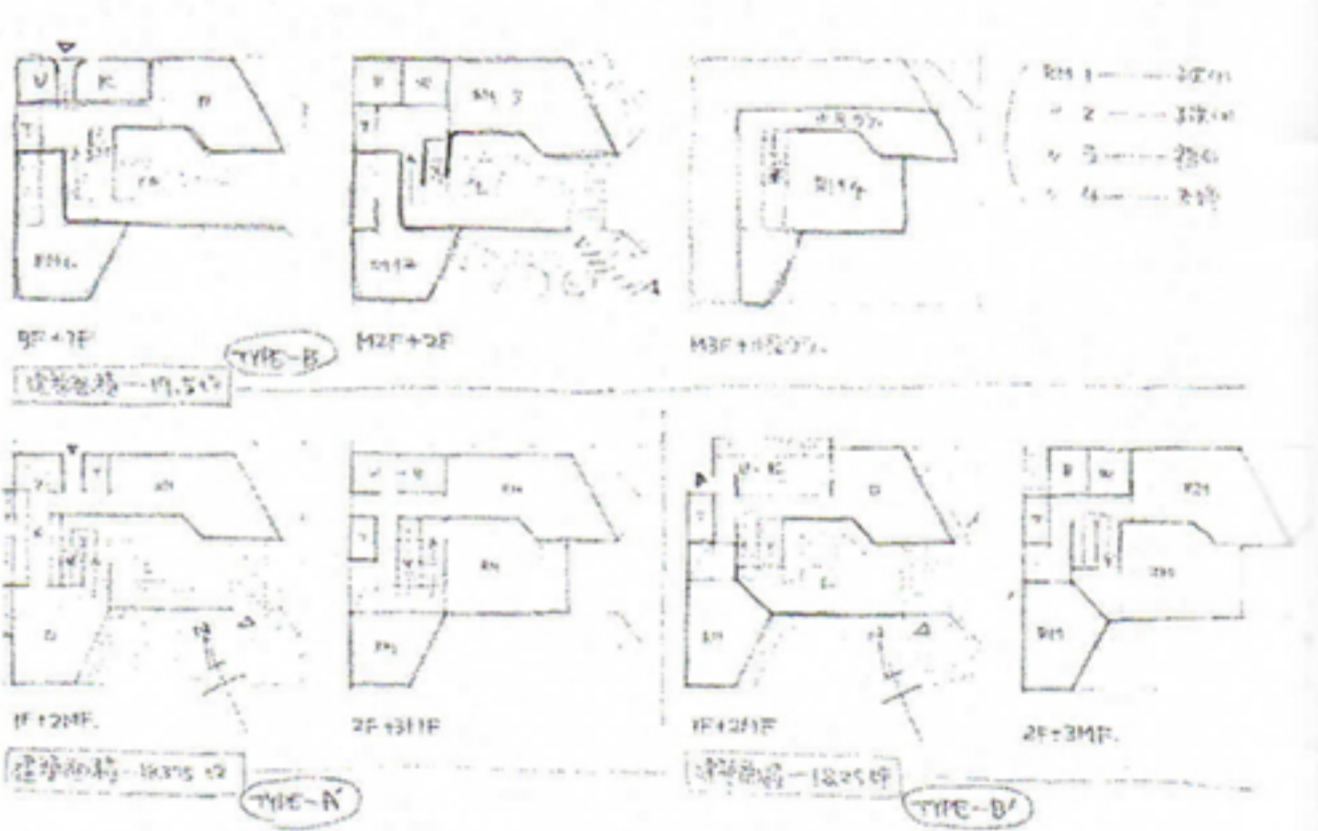


Fig-5



●最初の発想

淡緑色と水色の2.6m角の天津だんつうを、この敷地のどの位置に浮かばせようかと考え始める。どの部屋に置こうかではなく、敷地全体をひとつの空間としてとらえてみる。車の入路、玄関、勝手口など、道路との関係に対する配慮が優先する。ひな段状の芝生のテラス、サンルームのような玄関ホール、という思いつきとともに、早くもスキップフロアを暗示する断面が生まれる。(Fig-1)

●法的な条件

用途地域/第1種住居専用地域

容積率100%, 建ぺい率50%

高度地区/第1種高度地区, 5m+0.6l

道路斜線/1.25A

防火指定, 壁面後退なし。

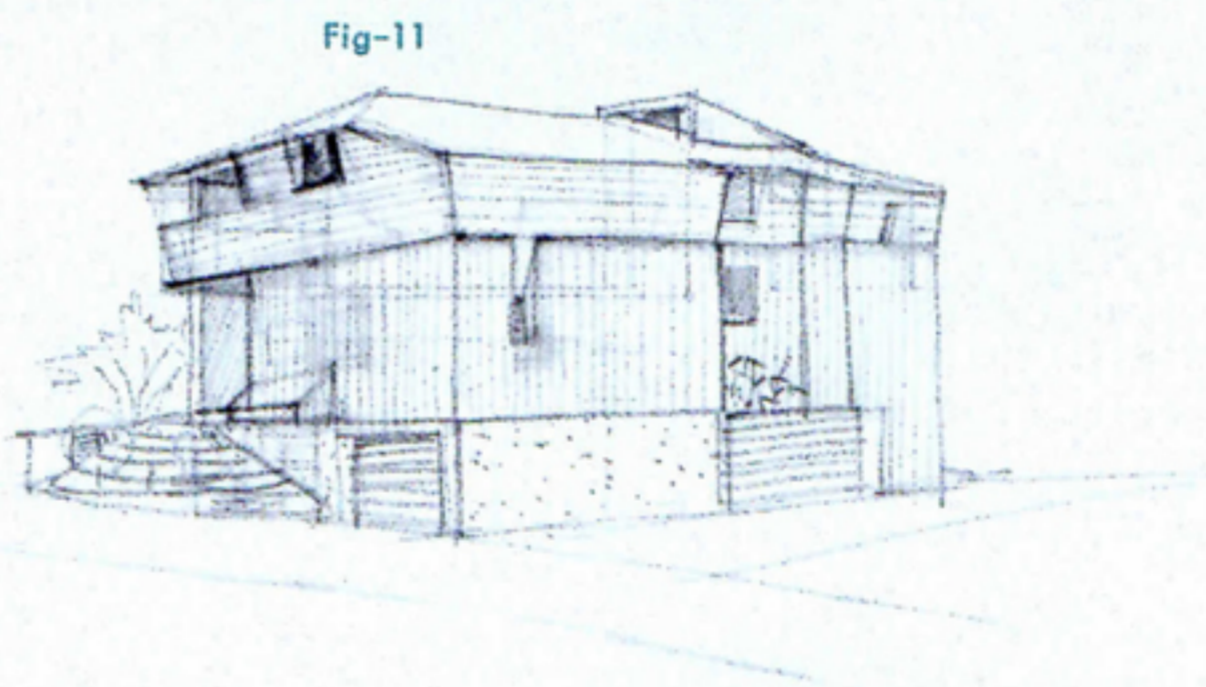
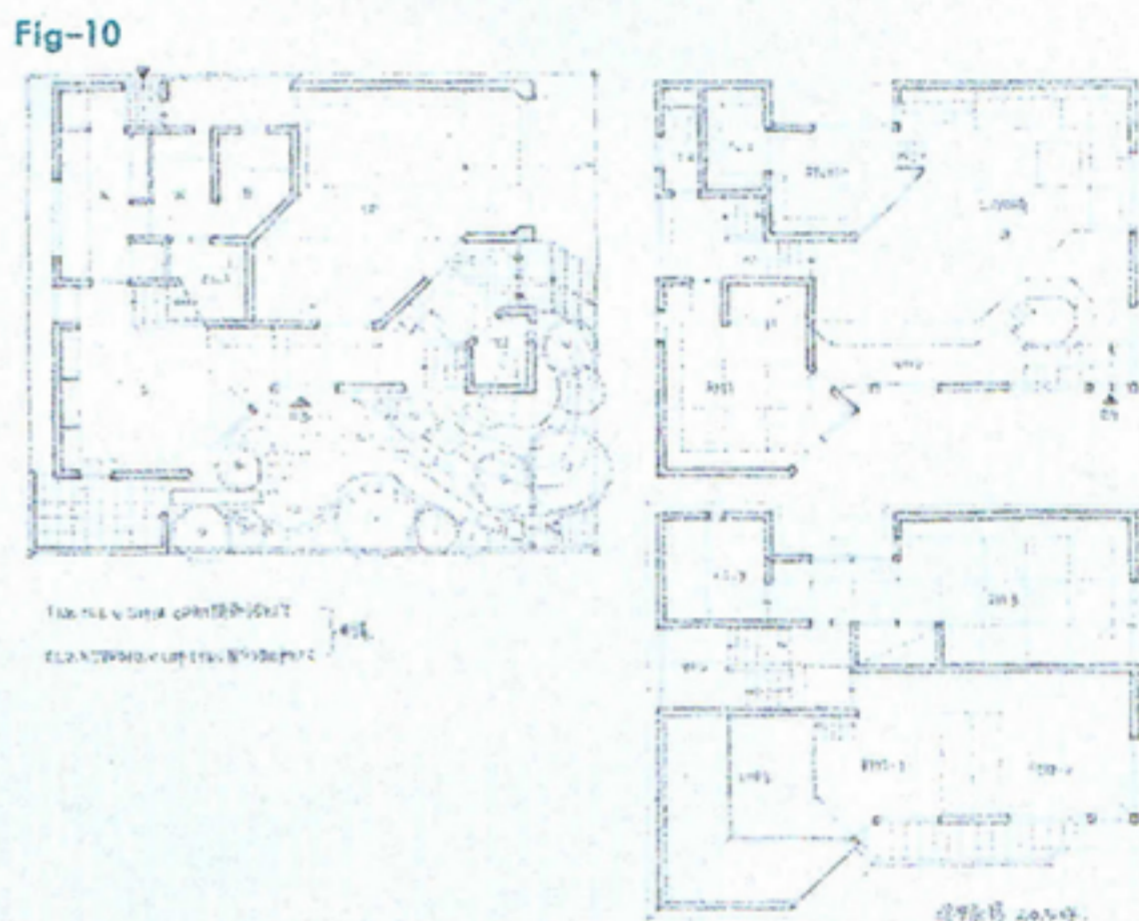
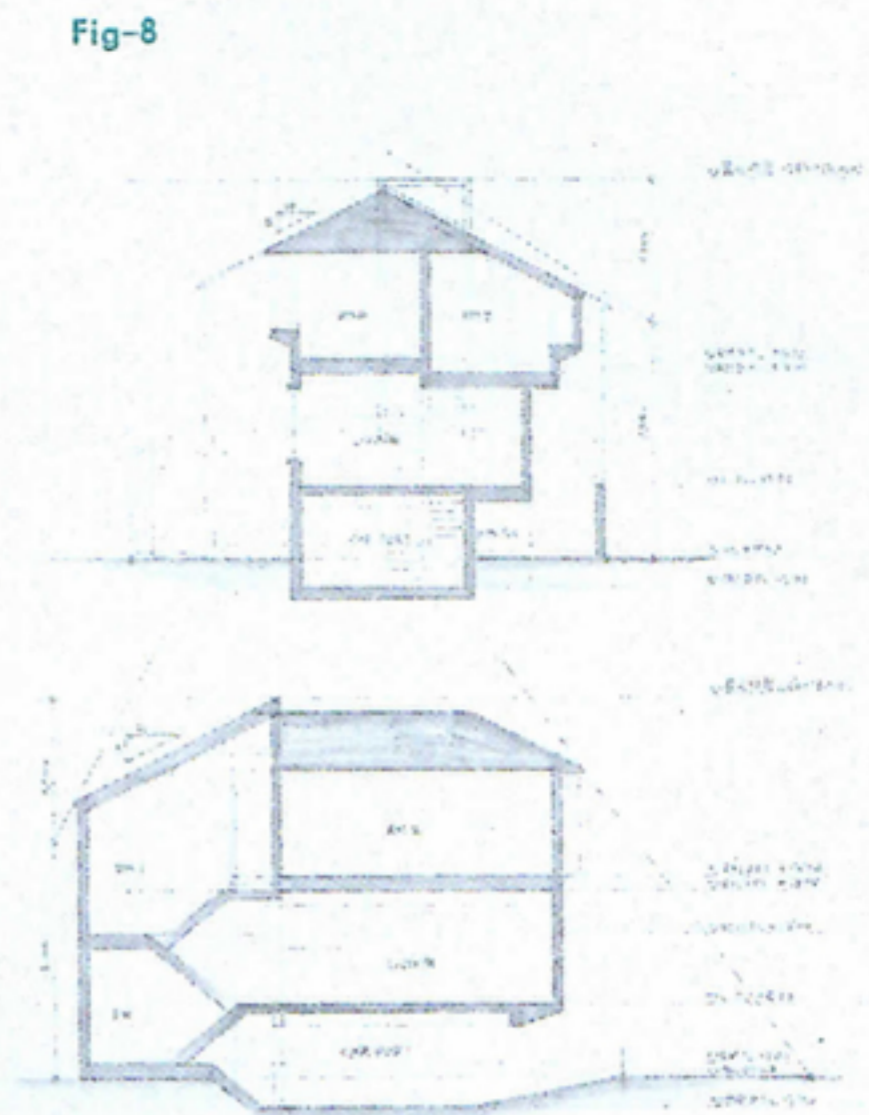
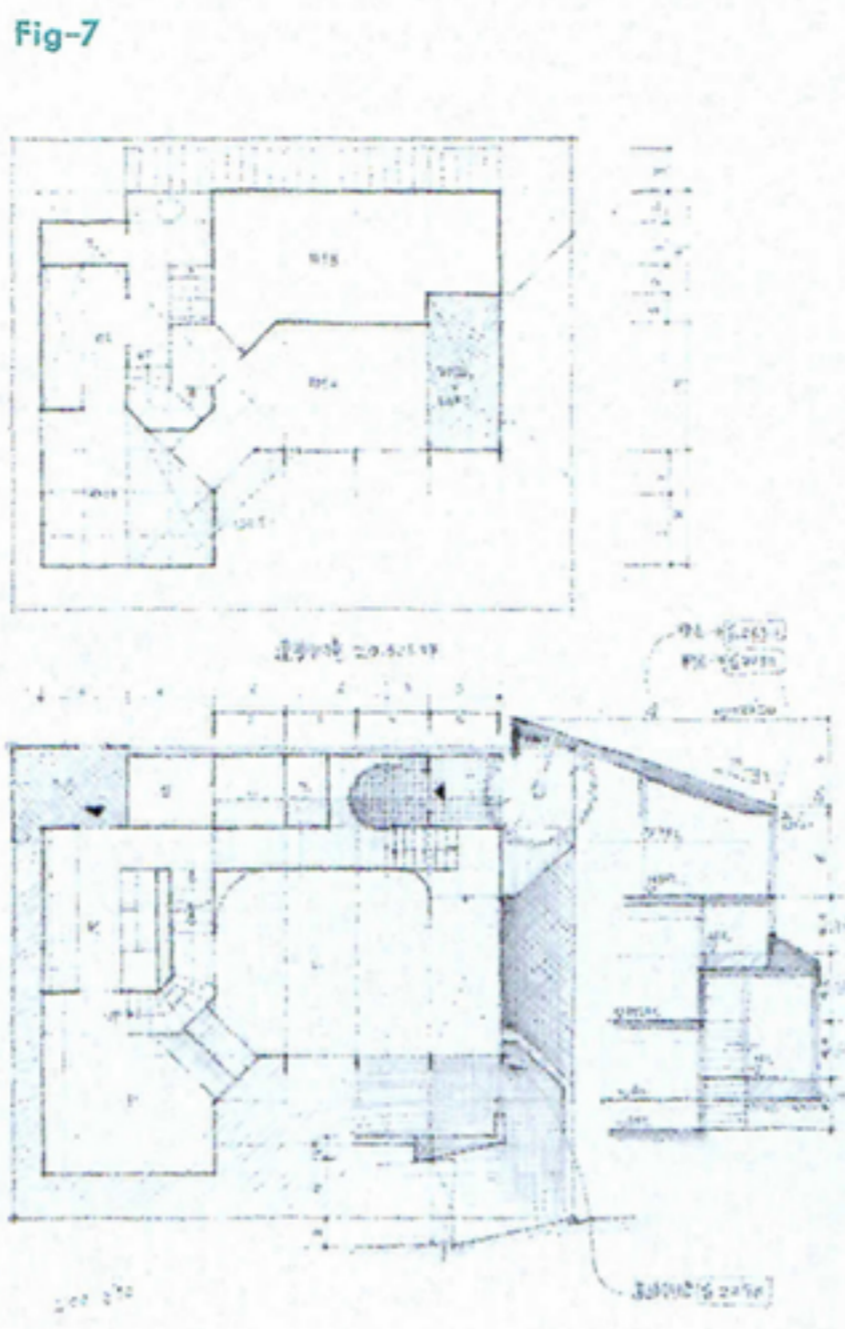
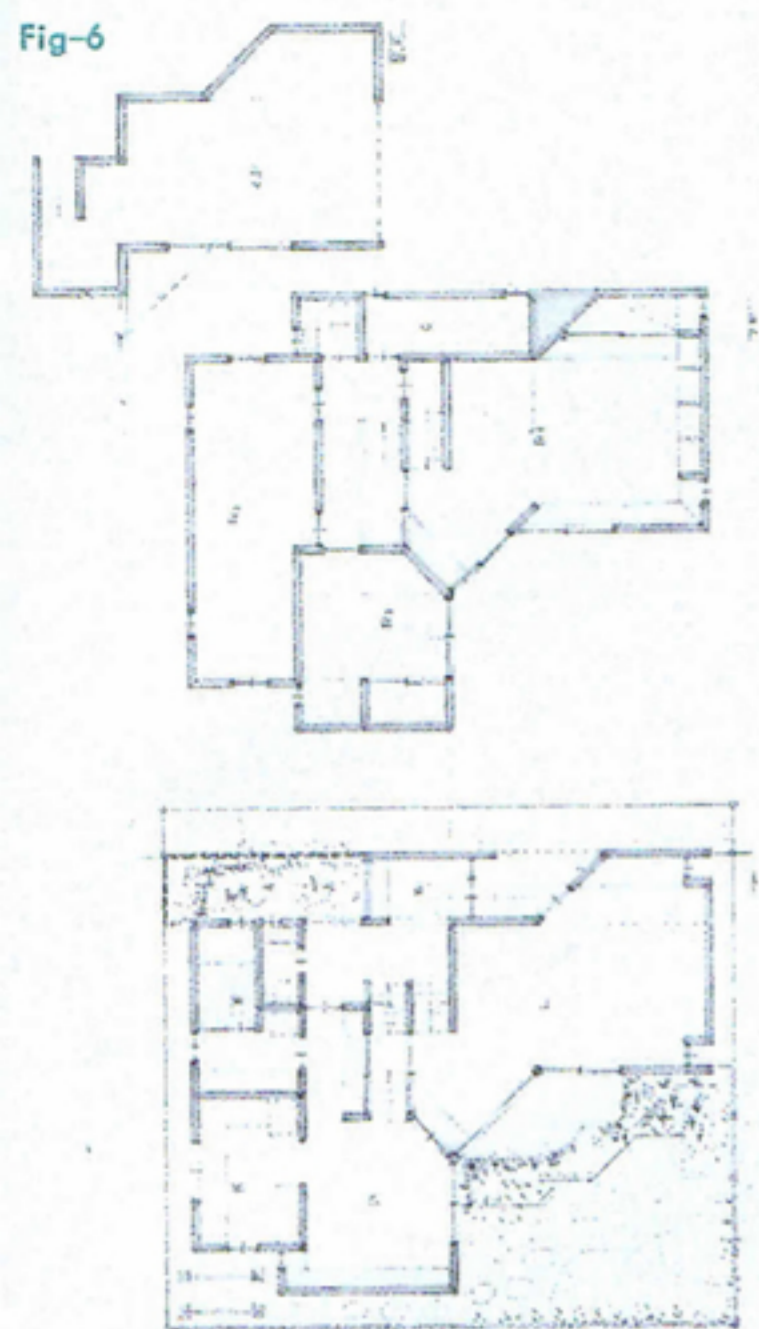
●ポイントは何か

これらの条件をおおよそ頭に入れながら、見当をつけてノンスケールで構成を考え始める。カーポートを道路からスロープで半地下に。庭と玄関の高低は? 配置を考えることと断面を仮定することは同時である。(Fig-2)ところで、このスケッチは現実に寸法的に成り立つであろうか。9尺, 12尺, 9尺の分割

を仮定し、尺の方眼紙に載せてみる。北の道路からを主入口とするとどんな可能性があるか、という配置の試み。(Fig-3)

Fig-1の基本的構成を踏まえて、仲間のひとりがエスキースを展開する。(Fig-4→Fig-5)半地下階から小屋裏まで、6層の床レベルを設定して、半地下の車庫とその上の居間を抱えるように、水まわりや、流れるような形の個室を配し、それぞれの部屋の主を仮定している。この段階で、建ぺい率、容積率の数字のチェックも始める。

半地下の車庫を北側に寄せて、庭を深くとろ



うとした案。135°の角度をプランの構成に適当に取り入れながら、北側の私道から玄関につなげ、建物中央に近い階段でスキップの構成を試みる別のエスキース。(Fig-6)
北側の高さの制限に対して、屋根の下にどんな空間がとれるか、平面の方も尺単位の細かさで記し、断面の追求をしていく。(Fig-7)
Fig-8 は Fig-13 (p.136) に近いプランの断面図で、北側と東側の制限に対して同時にチェックを行い、北東隅の納まり、北や東のエレベーションの検討を始めるきっかけになる。

●別の発想はないか
ほぼ長方形に近い敷地に対して、思い切って45°に振った配置を試みしてみる (Fig-9)。周囲の建物が、住宅地の直角を基本にした区画内に建ち並んでいる場合、対角線的な軸で計画してみると、庭の位置と形、住居への採光、室内からの視角など、意外に有利な効果を上げることができる。いくつかの例で採用し、実際に成功している。この案は、カーポートを地上に置いてみようとして、いかにもクルマが大きくバランスを壊しているの、実施には至らなかった。

Fig-10, 11 車庫を北側の下に納めて、南側に吹抜け的な空間を設け、車庫の上のリビングルーム (広間) の採光、視界に利用するという構成で、実施案に近づきつつある。アプローチとテラス、庭の関係に対して、階段や芝のスロープ、植栽などによって工夫をこらしている。そして北東側の外観の見え方をスケッチしてみる。希望された竣工日までのスケジュールを組んでみると、基本設計にあてられる期間は1か月余り、異例の短さである。同時に数人で取り組んだ意味がそこにある。

STEP-2

間取りの検討

Fig-12

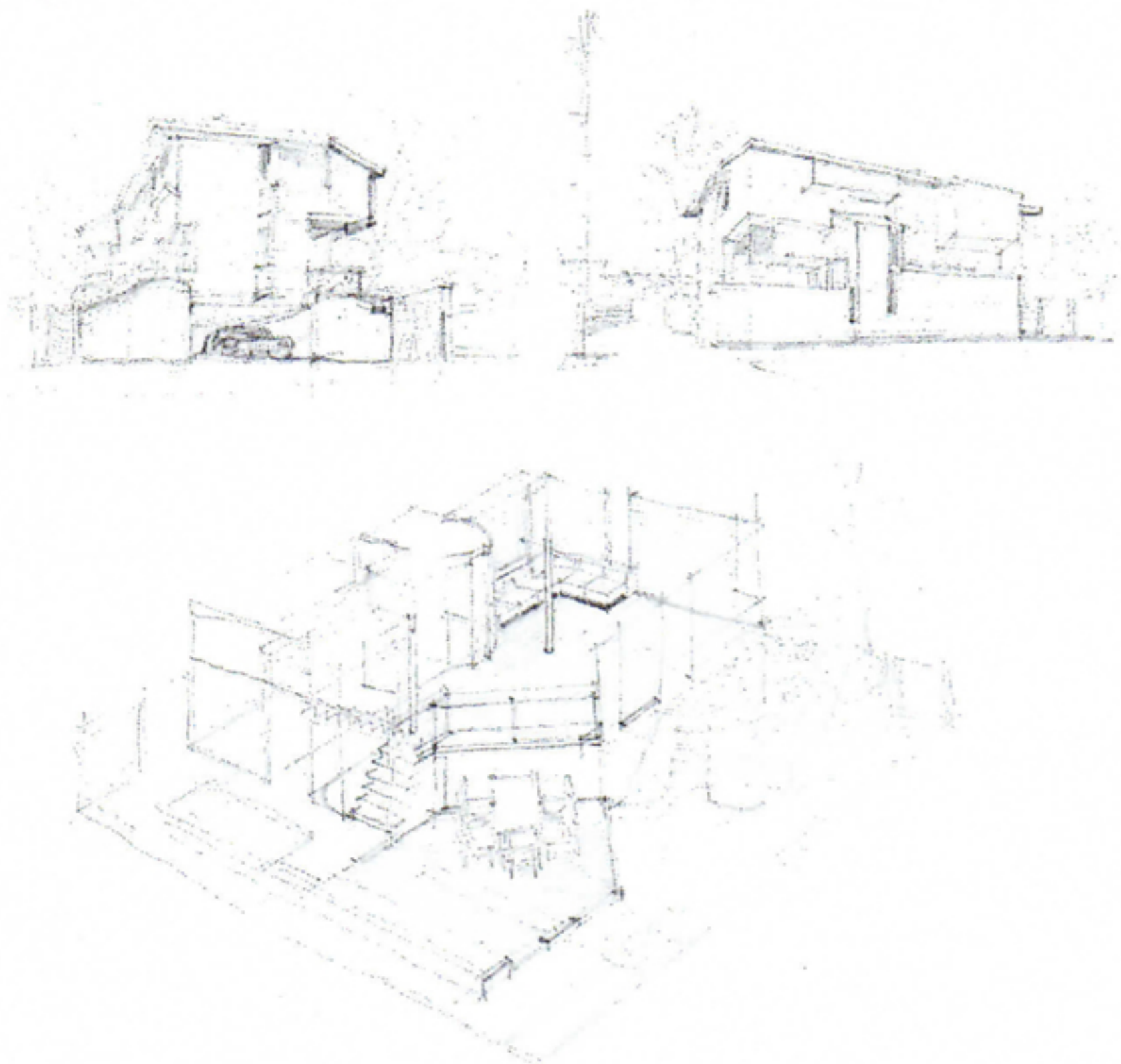


Fig-13

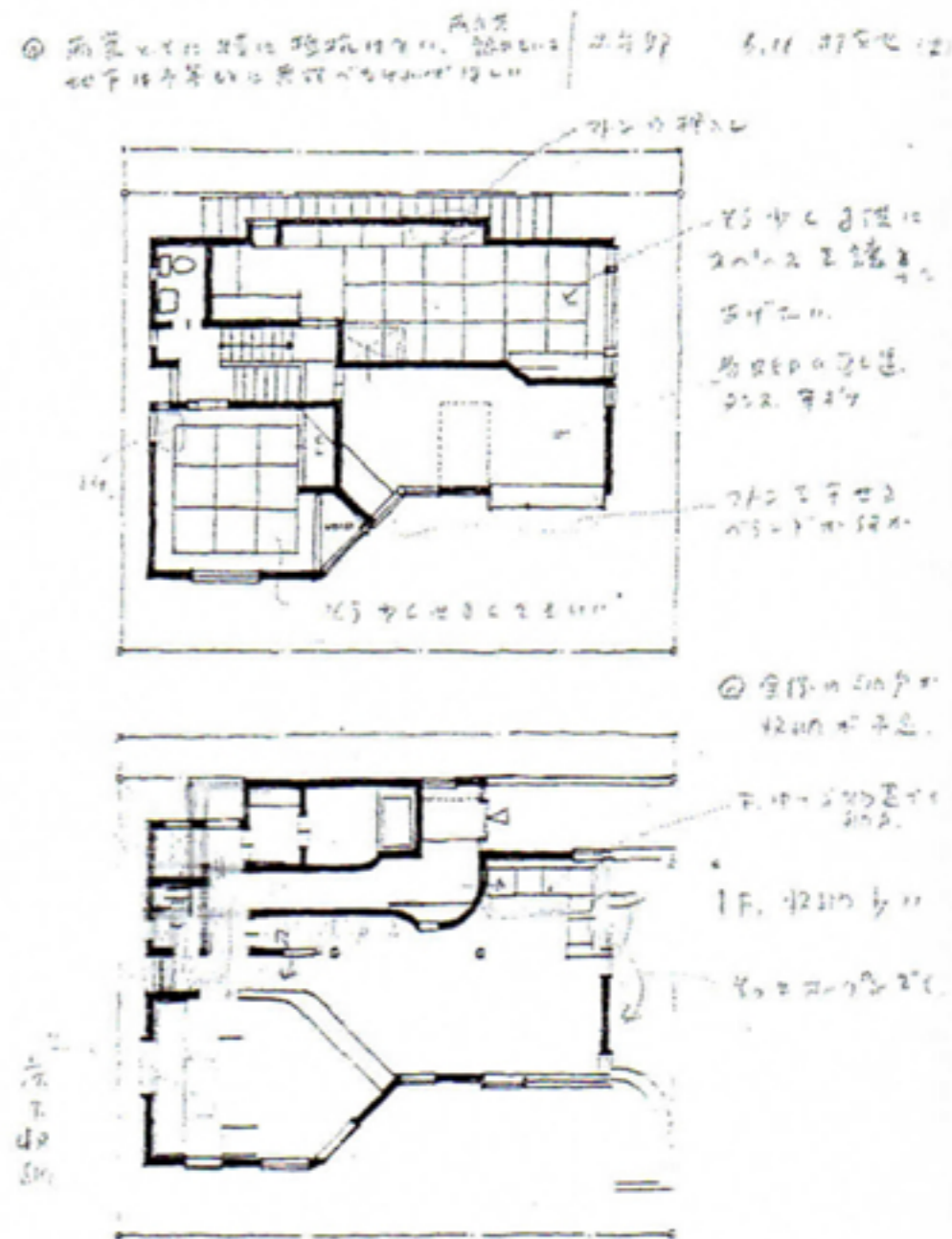
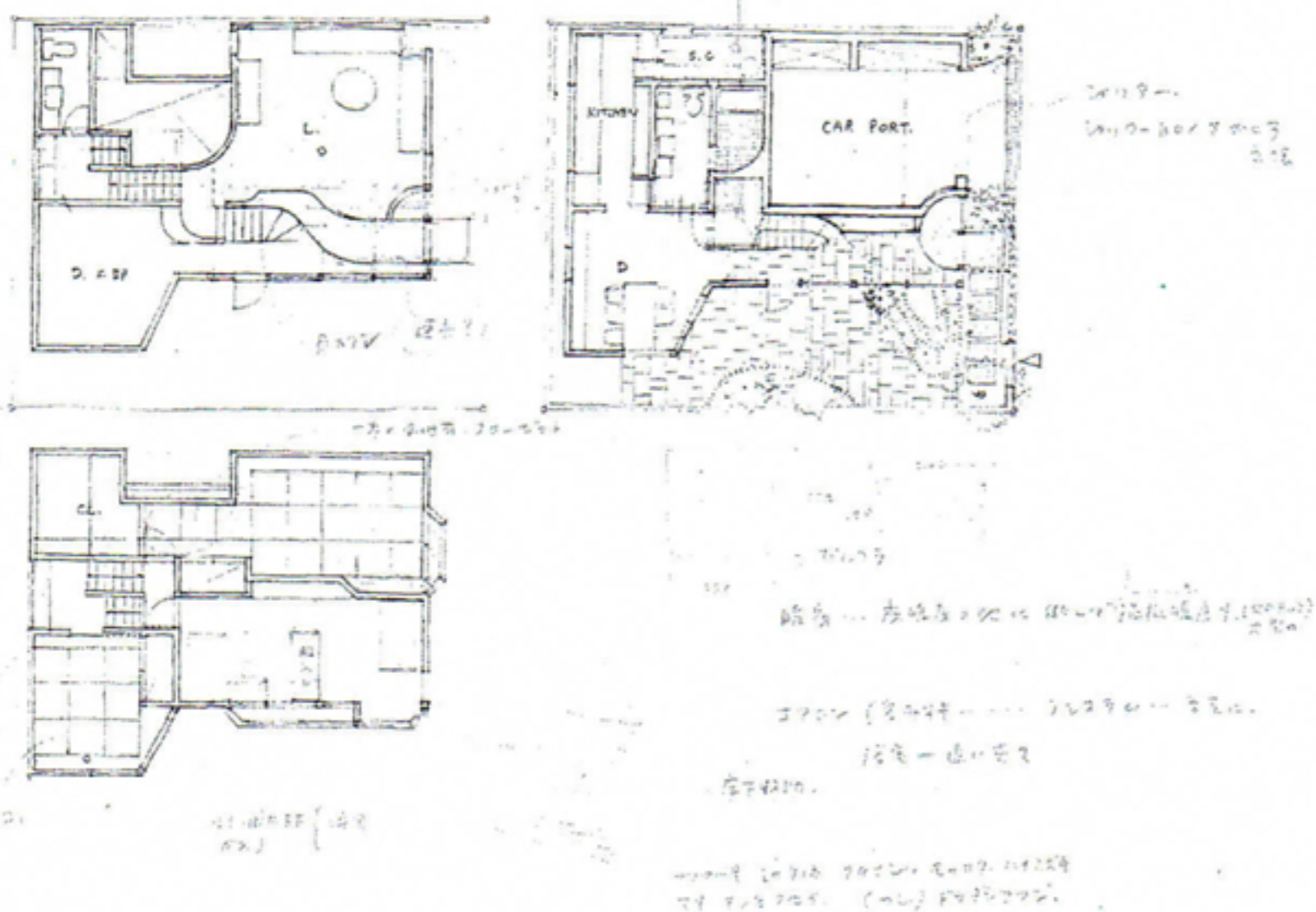
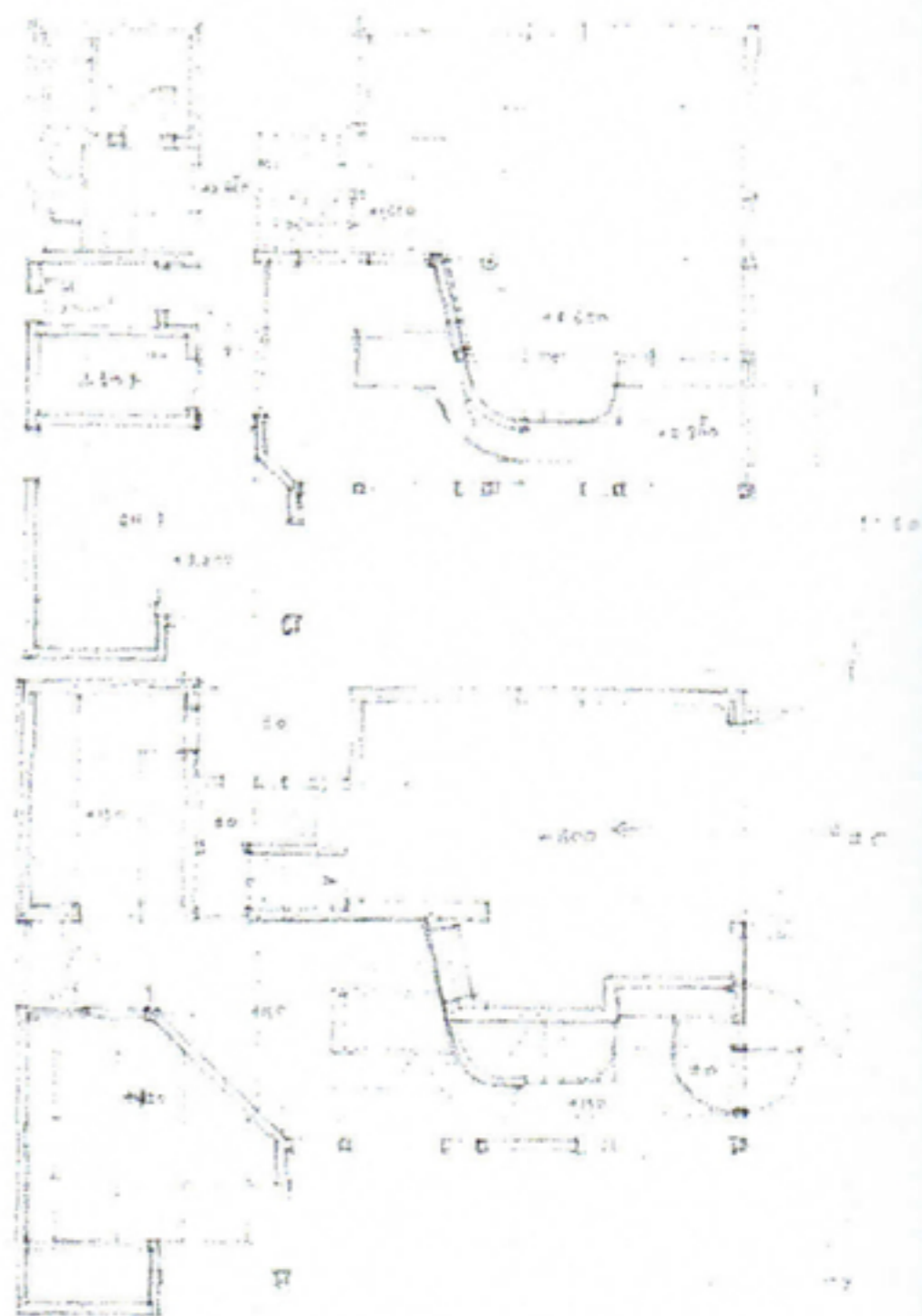


Fig-14



(エスキース/森史夫・伊藤哲郎・今任寛之)

Fig-15



●基本案の選択

北入り玄関の案 (Fig-12, 13) と南入りの案 (Fig-14) を並べて、施主と基本案の詰めを行う。プランのコピーの上に、施主たちの意見や注文を書き込む。家具の置き方、視線のチェック、収納の量……。

北入りの案 (Fig-13) は Fig-10 からの展開で、南側に盛り土したテラスを持つ。南入りの案 (Fig-14) は、玄関を庭と一体化して床レベルをそろえ、仕上材も石かタイルで同一にして、視覚的な広さを得ようというアイデア。南の庭寄りの空間の構成はGLぎりぎりの玄

関とホールの床レベル、その天井を兼ねたような広間側からは一段高い幅広い棚に見える台状の板、広間天井までの開口部、細長い吹抜けなどのからみ合いから成っている。(p. 138~140断面図、矩計詳細図参照)

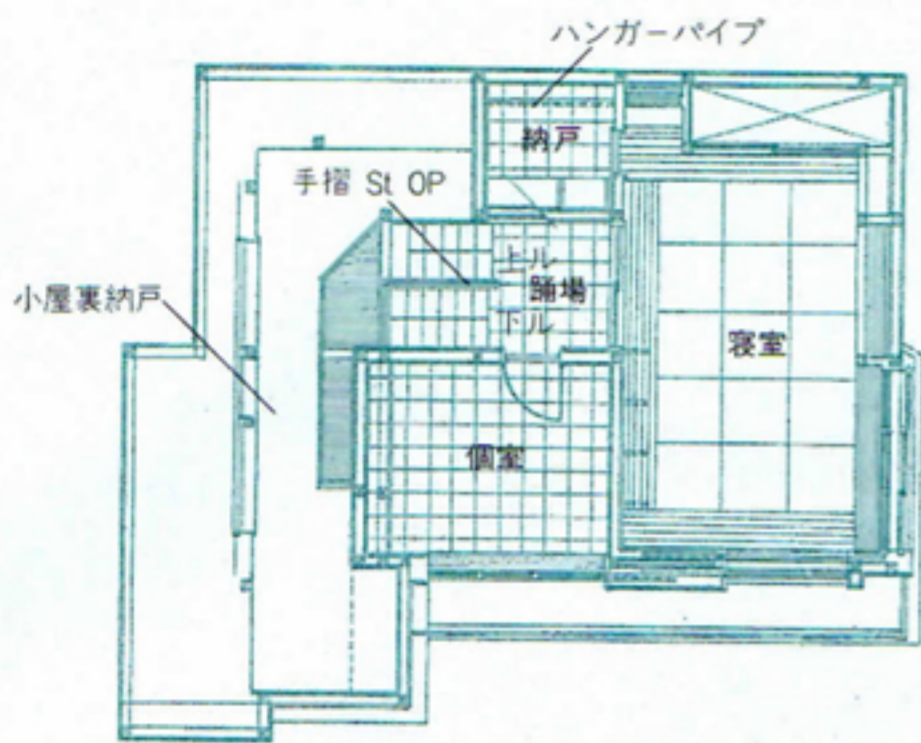
この構成にゆきついた時点で、この案をベースにして、スケールアップして細部の検討へと進んでゆく。(Fig-14→Fig-15)

母堂の部屋を1階の食堂の脇に、寝室群を上階に配するという構成は当初から変わっていない。書斎を兼ねた主寝室と二つの子供室の組合せは、結果的には各室とも南面するプラ

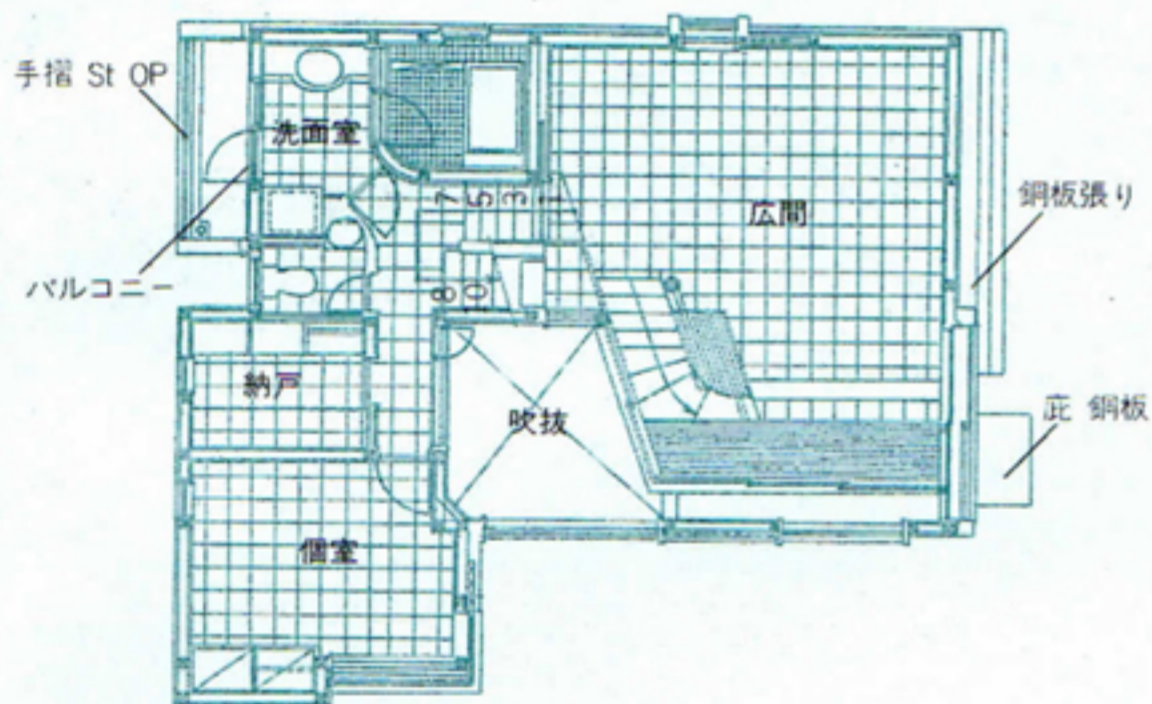
ンに落ち着いた。敷地の東南の角にいかにも屋外空間を確保するかという命題は最後まで貫かれている。

思考を重ねて右往左往を繰り返して生まれたスキップする6層の内部空間を、最後に銅板をかぶせた形の屋根と、土佐漆喰の壁と、暗褐色の渋いタイルという外皮に包み込む。この外観は、前面道路の幅員や日影規制という制約によって必然的に強制されるシルエットを、「初めからこの形にしたかった」ように見せたいという涙ぐましい努力の結果なのである。

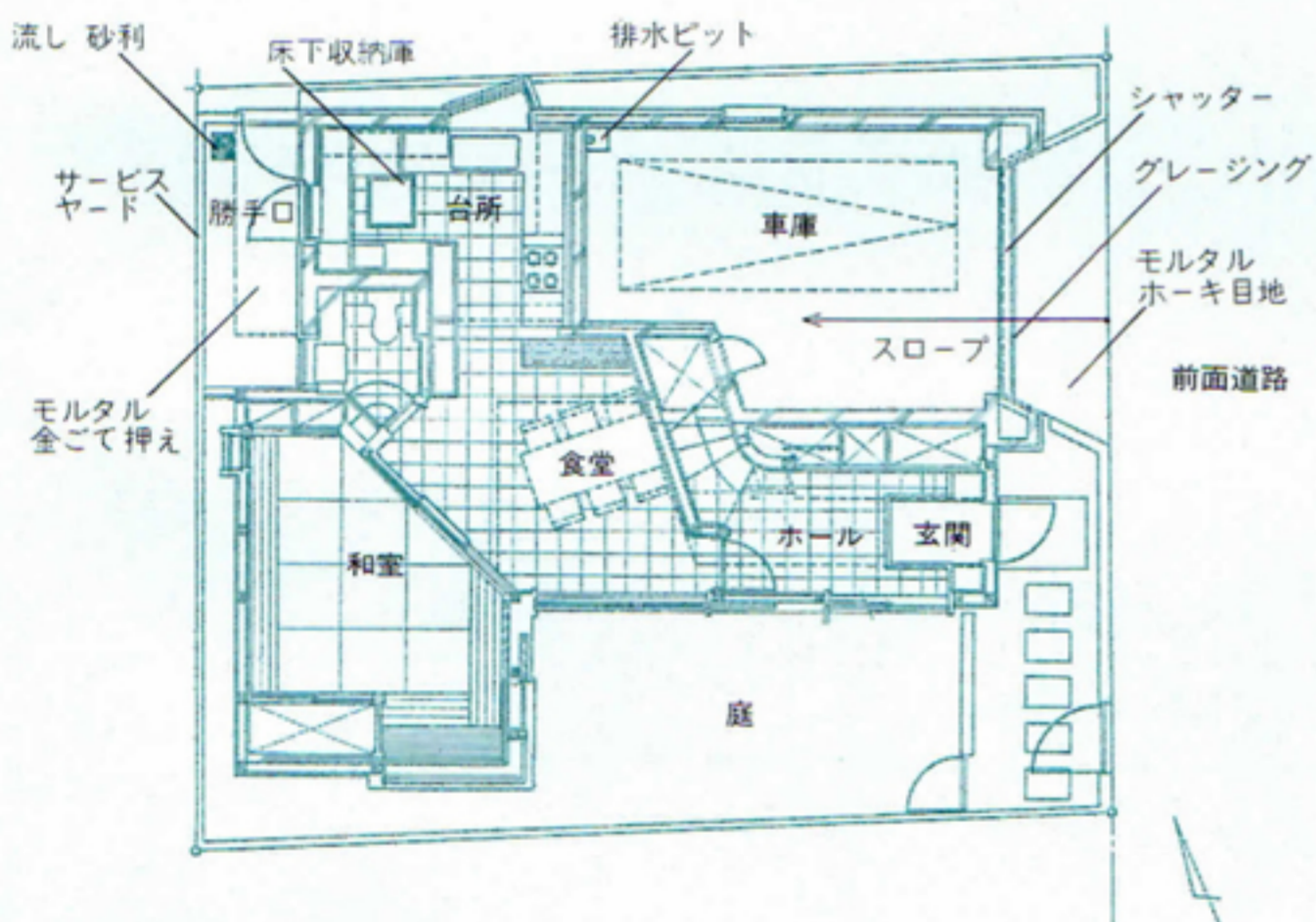
STEP-3 実施案の決定と最終モデル



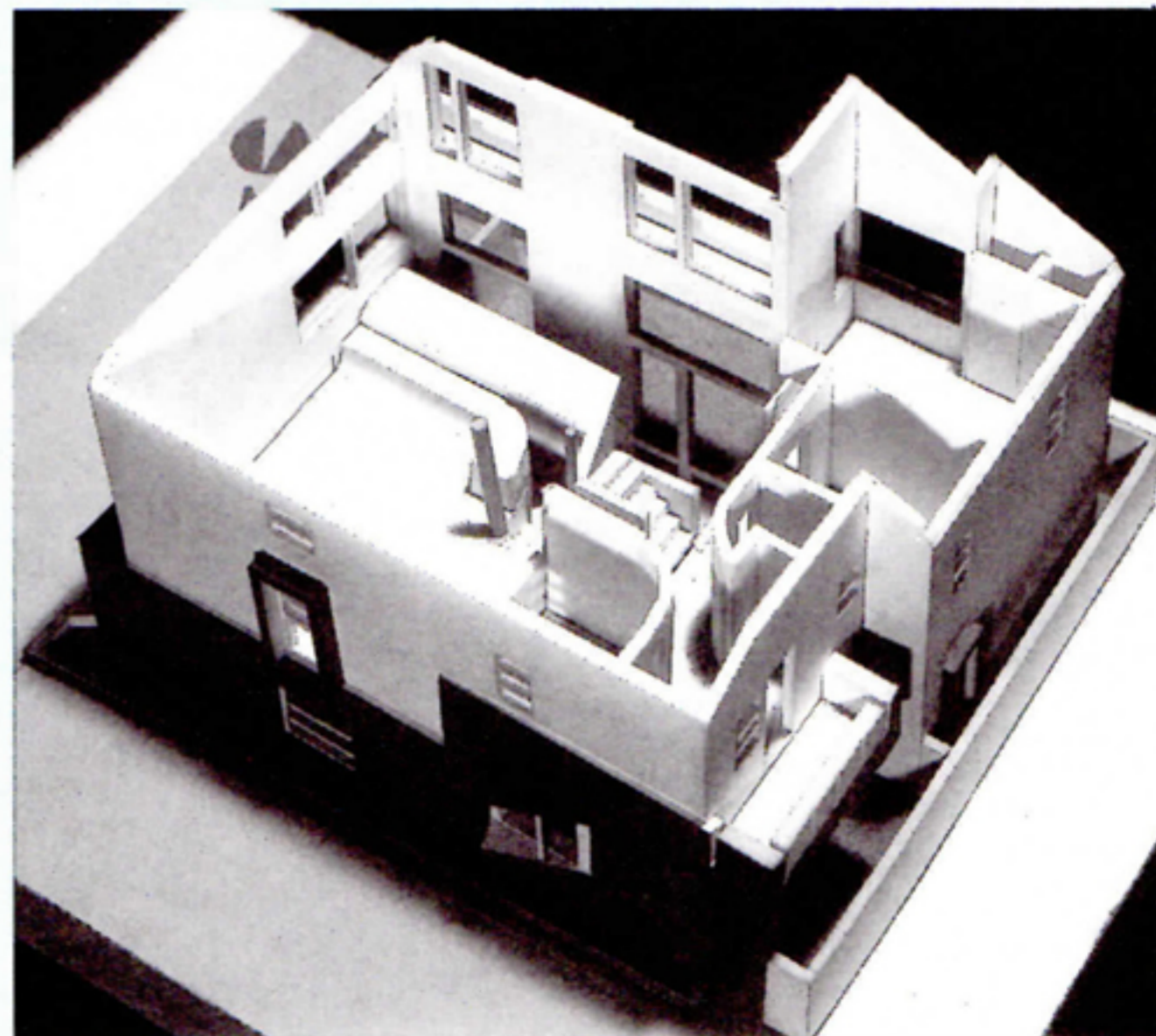
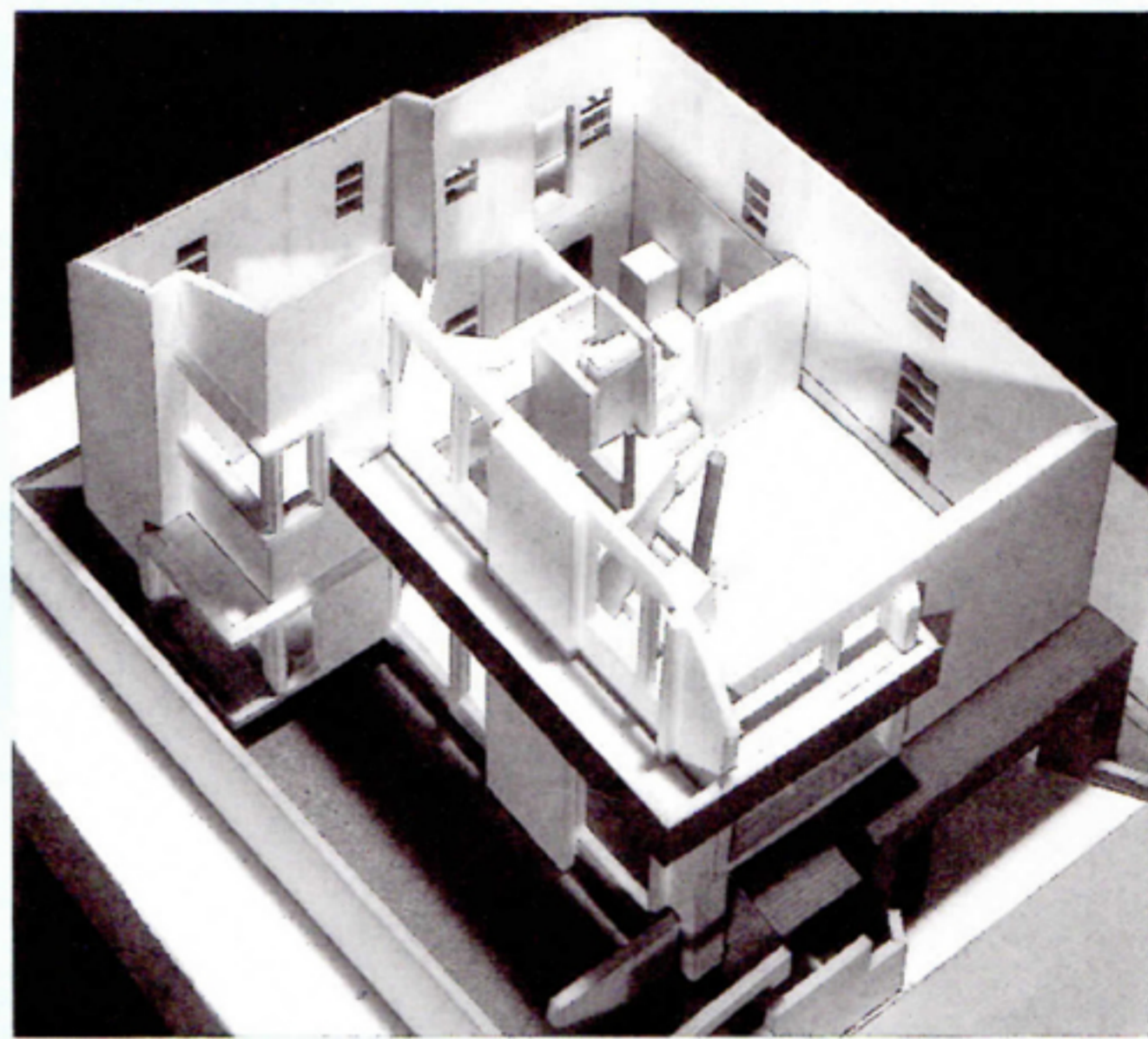
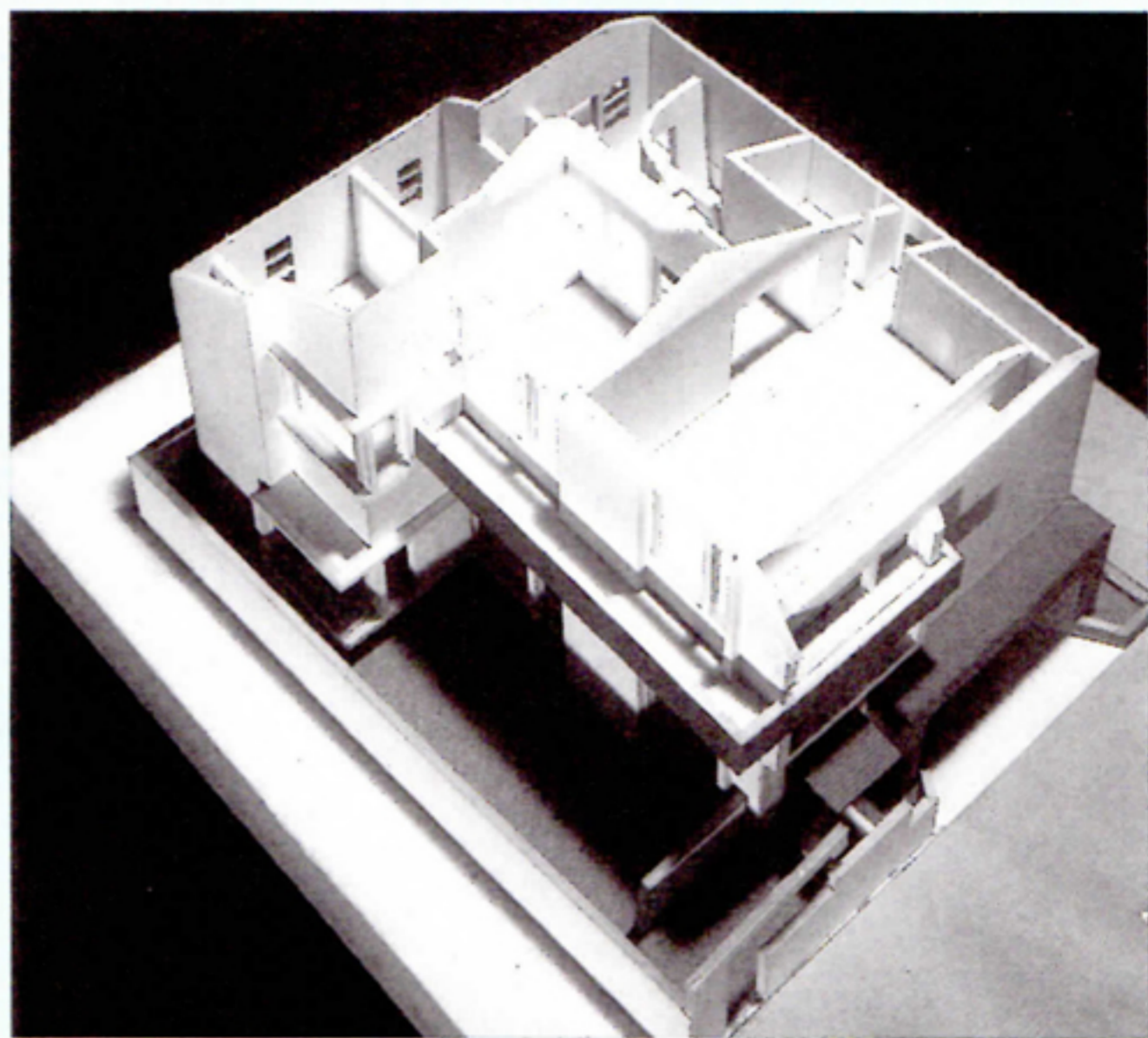
中3階・小屋裏平面



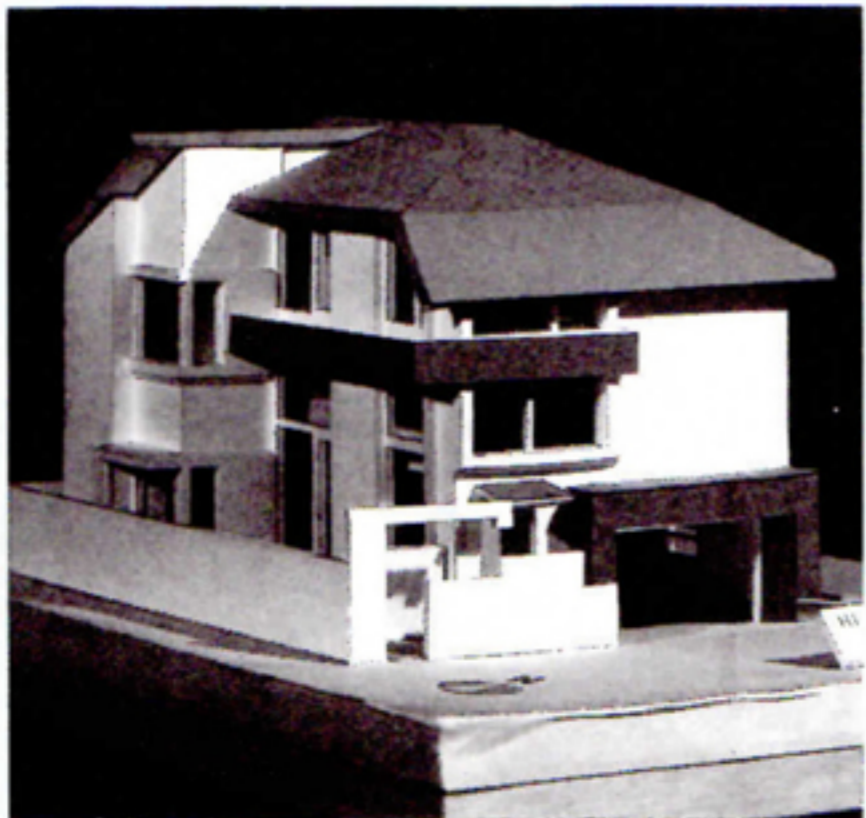
中2階・2階平面



地階・1階平面 1/200



マッサを見るための1/100の粘土モデル、実施案の図化の直前に壁や床の構成を確かめるための1/50のスチレンボードによるモデルを経て、最終モデルを製作する。最下層を除いて半階ずつ取り外すことのできる仕組みにして。



玄関土間を GL±0、ホール FL を +5 寸に抑え、半地下の駐車場の上の広間は GL より 5.0 尺上がり。南側開口部は広間の天井面の高さまで、12.8 尺のアルミ建具を外付けにし、その面より 1.5 尺内側までを細く吹抜けにした。玄関ホールの天井に相当する広間の FL から 2.5 尺上がった台の端に、高さ 5 尺の紙障子を立て、これを開け放つと南側の大きなガラス面まで空間が続いているように見える。食堂は広間の天井と同じ高さ、同じ材質でつながっている。広間が実際の床面積よりはるかに広く感じられるのはそれらの仕組みによる。

周囲の住宅の標準的な 1、2 階の床高と、3~4 尺ぐらいのずれが生じた結果、お互いの窓の高さが食い違い、視角的なプライバシーが守られ、風景の見え方も新鮮になるという効果をもたらした。



設計/設計室 MORI

担当: 森史夫・酒井行夫

施工/頸城建設

構造/鉄筋コンクリート壁構造(地階)+木造2階建

竣工/1987年10月

所在/東京都世田谷区

敷地面積/133.94m²

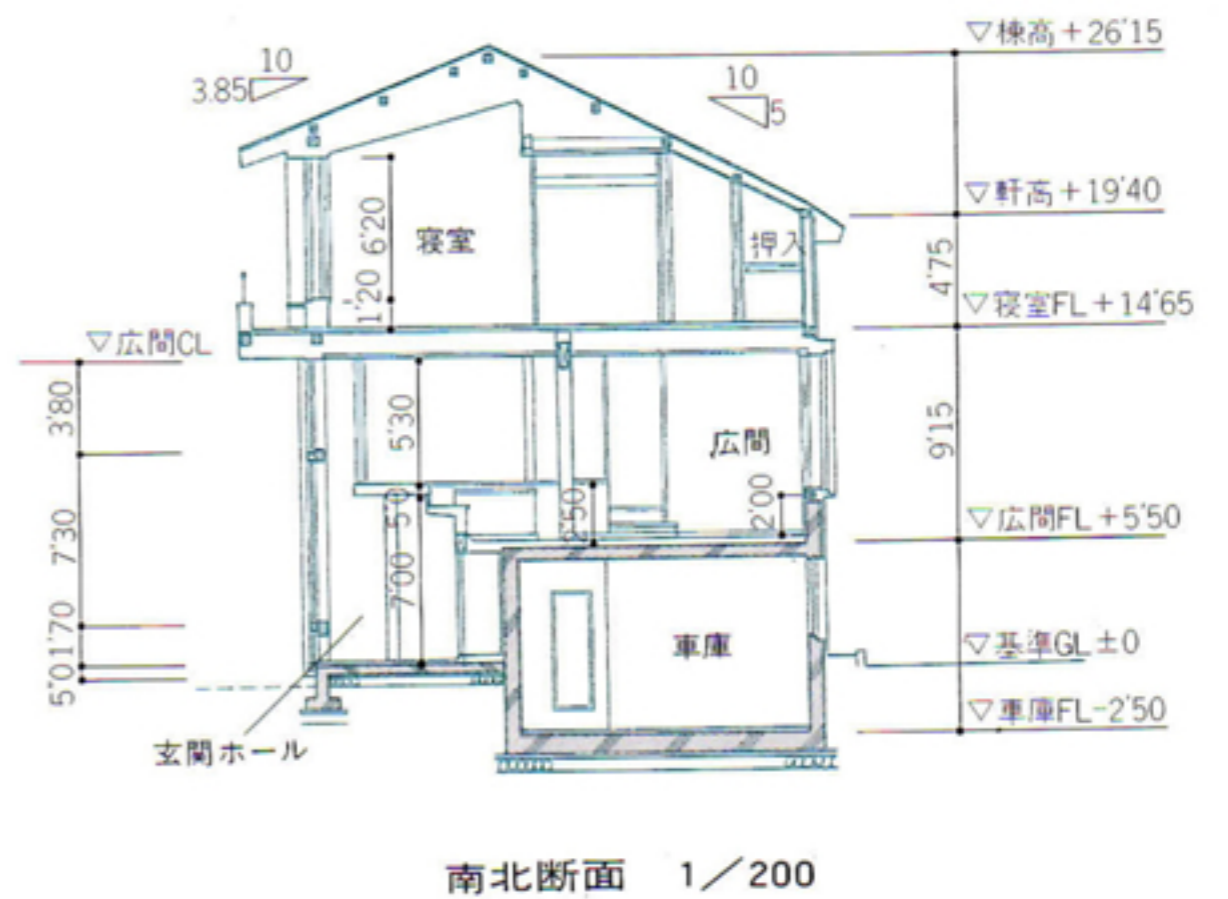
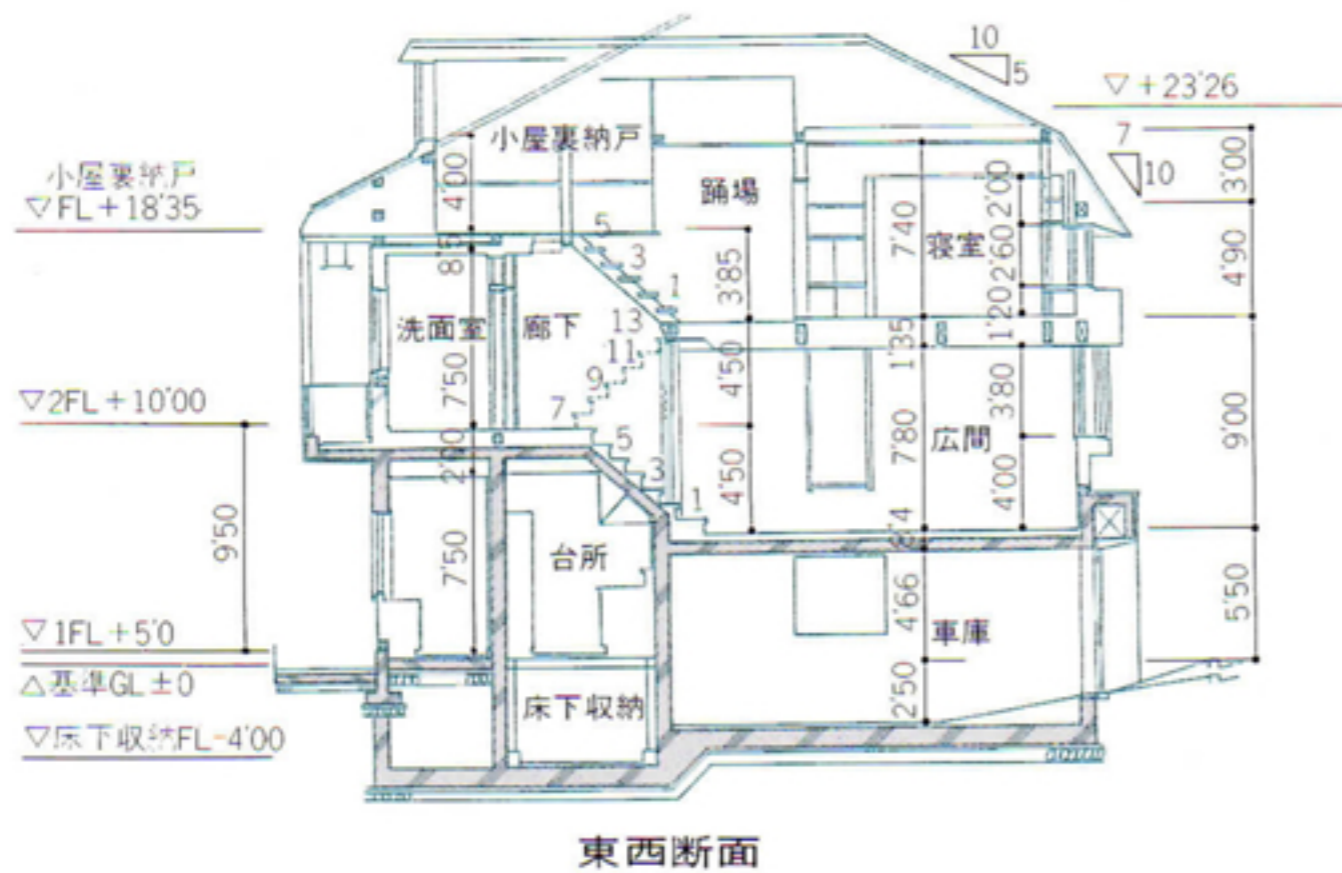
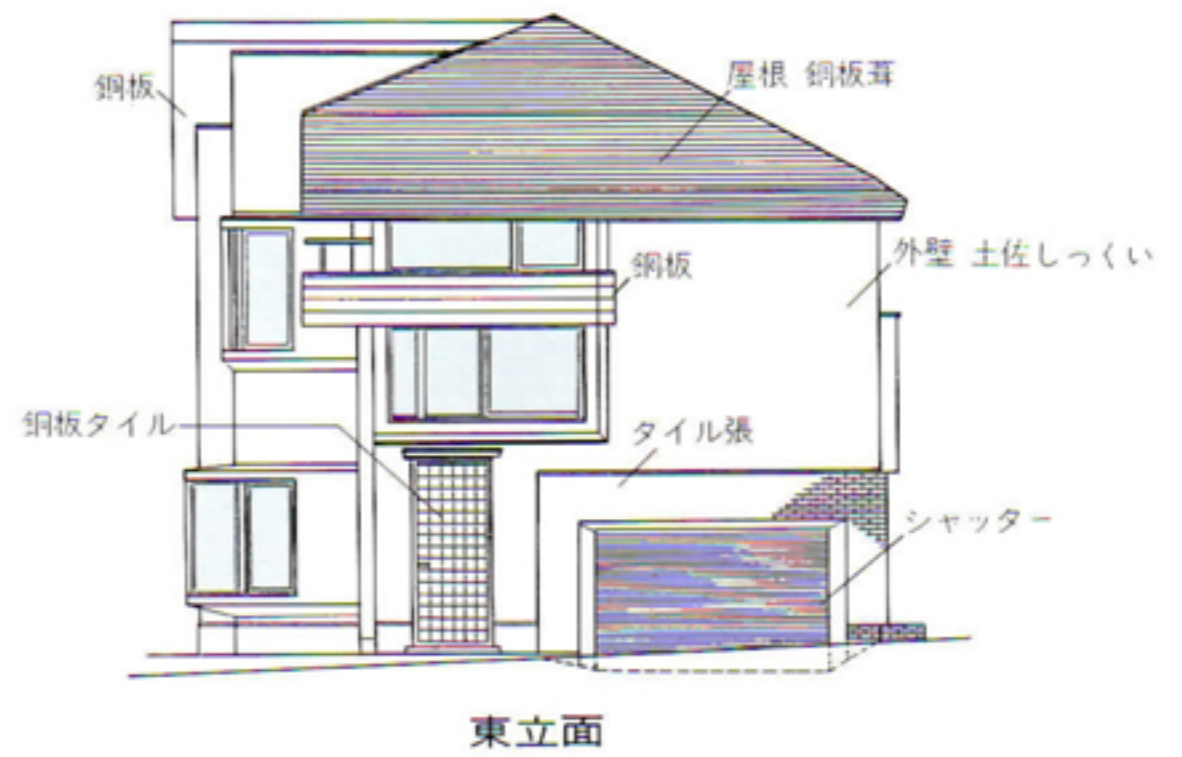
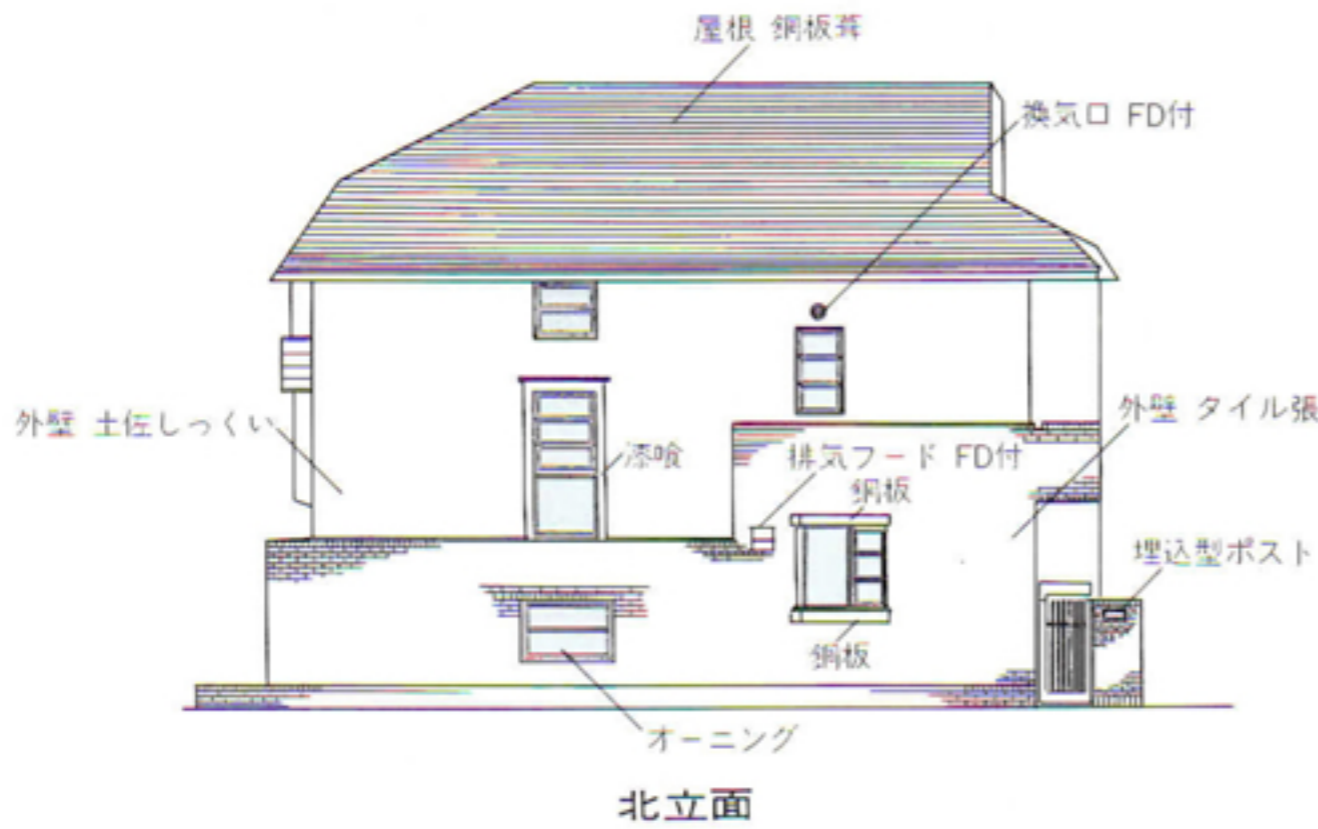
建築面積/66.42m²

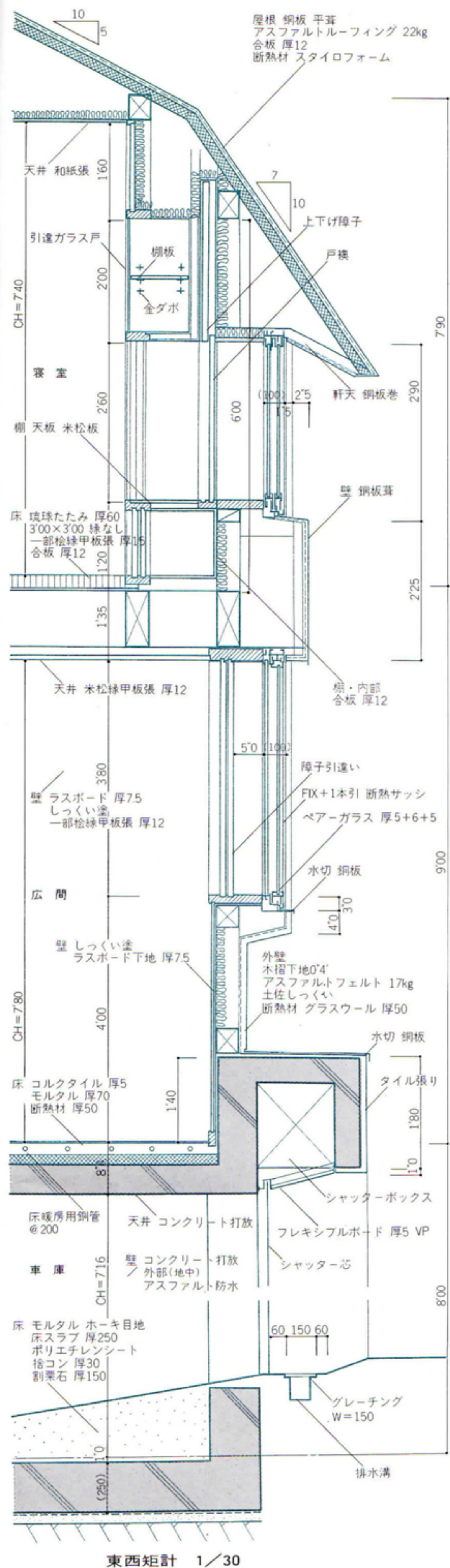
延床面積/151.68m²

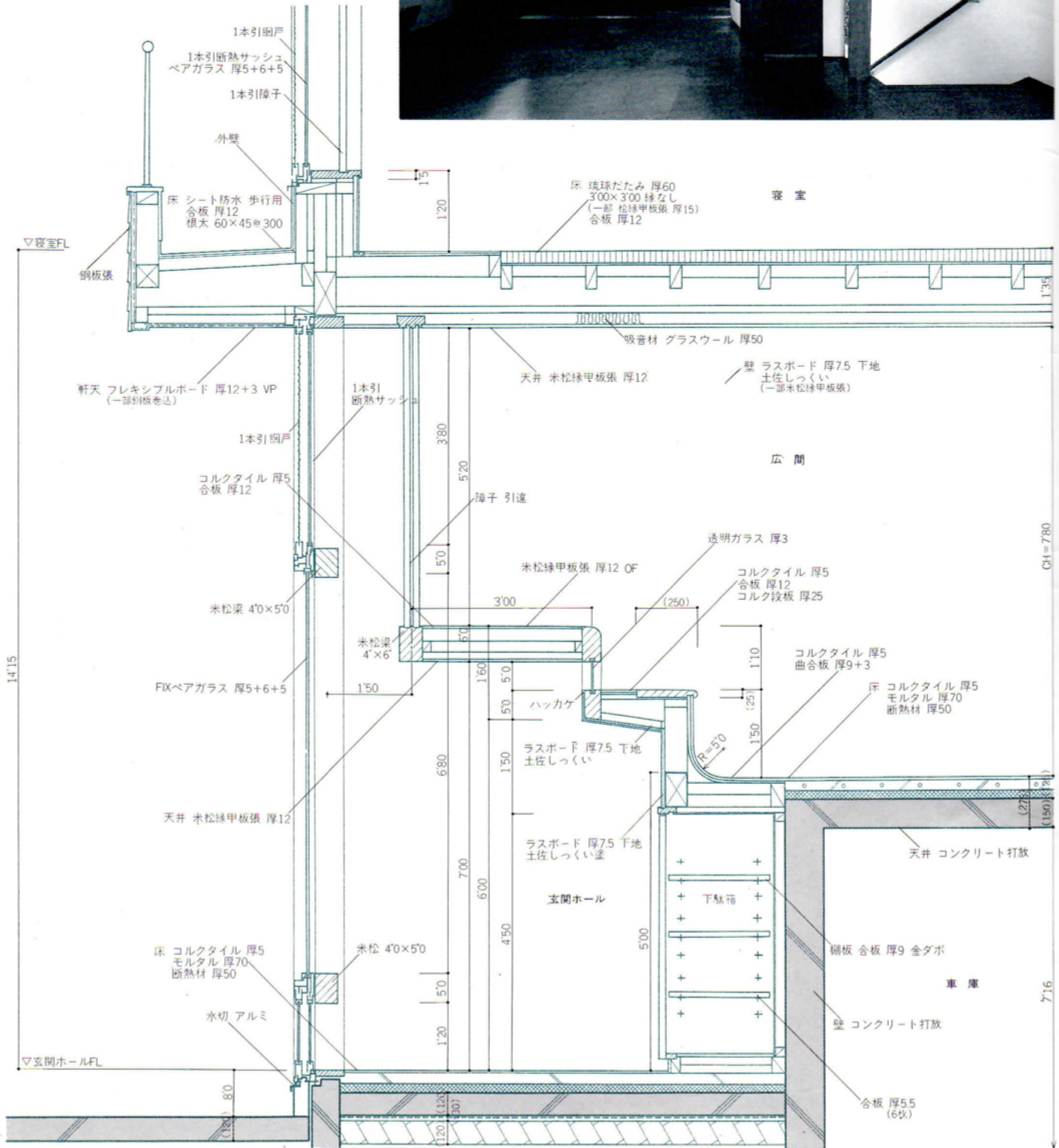
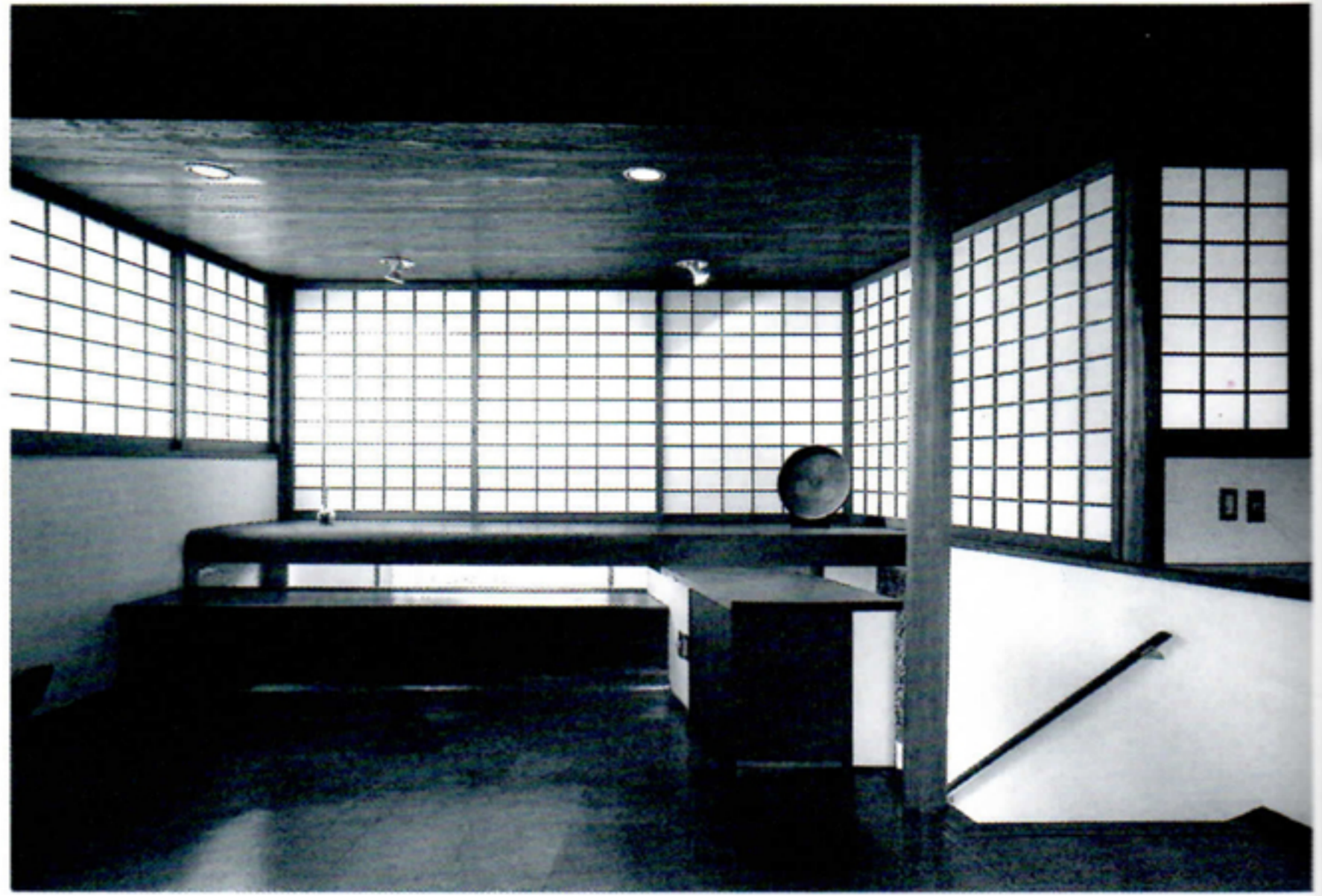
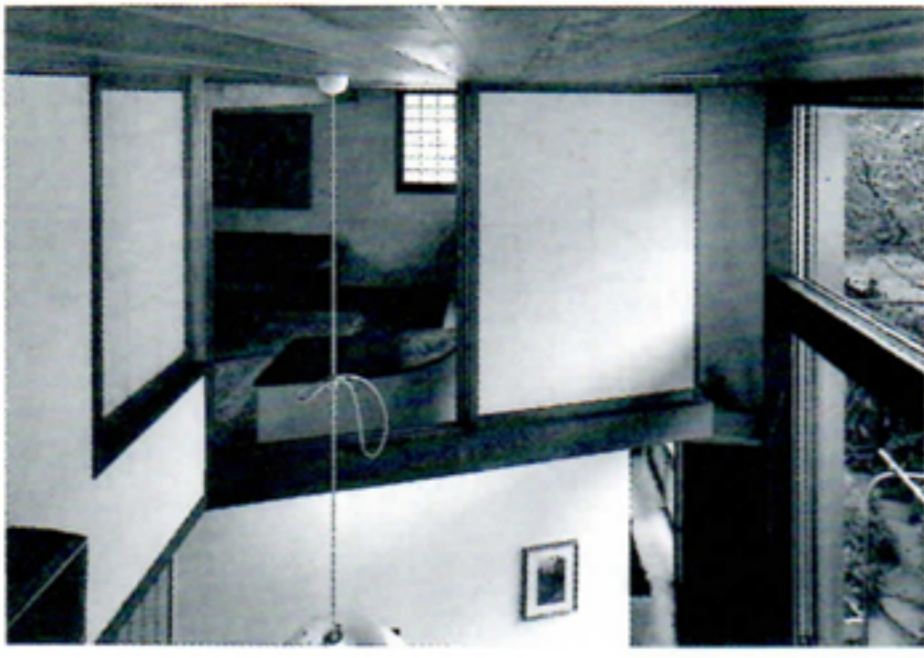
地階: 18.84m²

1階: 66.42m²

2階: 66.42m²







玄関入口まわり断面詳細 1/30



建物も健康に生きるのが大切。 上手に歳をとりたいのは 人間だけじゃありません。

ヒューマンスケール

内井 子供の頃育ったのは西洋館で。かなりヨーロッパ的な感覚っていうのが、僕自身の中にあるんです。個人主義とか、合理主義とかね。それで、僕は建築にも個と全体の調和に設計のポイントを置いているわけです。

ところが近代建築は、全体の統一感はあるけど個を無くしていく方向ね。これじゃ、深みなんてものは無い。

山内 まったく、そのとおりですね。

内井 近代建築のもうひとつの特徴は、すぐ陳腐化すること。資源有限時代に、そんなに短い生命のものをつくっていいかなと思う。

で、建物も人間と同じように長生きしなきゃと。健康に生きる建築が必要なんです。最近建築が巨大化して、人間の手の内に入らない。建物が健康に生きるには、適度なサイズでないと無理だと思います。私はこれを、ヒューマンスケールと考えています。

美しい銅の経年変化を生かす屋根材

山内 建物も、人間と同じように健康でなければならぬなんて、素敵ですね。

空気との接触によって出来た被膜がもたらす経年変化で、美しく上手に歳をとっていく銅。また、他の材料に比べ長持ちし、メンテナンスも手軽です。サンボアの銅屋根材バチナ、ノワールは、この、20年近くかかる黒赤色から緑青色への変化を化学処理により、深みのある均一な色で実現しています。

内井昭蔵

山内美郷の銅々巡り①

うちい しょうぞう

1933年東京生まれ。1956年早稲田大学第一工学部建築学科卒、後同大学院修了。現在、内井昭蔵建築設計事務所代表、建築家。主な作品は、桜台コートビレッジ(日本建築学会賞)、身延山久遠寺宝倉(レイノルズ賞)、YMCA野辺山高原センター(吉田五十八賞)、世田谷美術館(毎日芸術賞、日本芸術院賞)。

やまのうち みさと

1948年神奈川県逗子市生まれ。日本画家を志すが断念。結婚後、雑誌に「父の恋人」を発表し、エッセイストとして活動を始める。著書に「食卓のエッセイ」「曇さがりのひとりごと」など。テレビ朝日「象印クイズヒントでヒント」の解答者としても活躍中。



●世田谷区立美術館 バチナ1: 11,000㎡
所在地: 東京都世田谷区砧公園
設計: 内井昭蔵建築設計事務所
施工: 清水建設

三宝伸銅工業株式会社

東京販売店/〒110東京都台東区台東1-30-5 TEL 03(3833)5311
大阪販売店/〒542大阪市中央区島之内1-3-12 TEL 06(252)1091